スタンダードモード用移行ガイド

JobCenter

R16.2

■Windows, Windows Server, Microsoft Azure, Microsoft Excel, Internet Explorer および Microsoft Edge は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

■UNIX は、The Open Group が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。

■HP-UX は、米国 HP Hewlett Packard Group LLC の商標です。

■AIX は、米国 IBM Corporation の商標です。

■Linux は、Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

■Oracle Linux, Oracle Clusterware および Java は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。

■Red Hat は、Red Hat,Inc. の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

■SUSE は、SUSE LLC の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

■NQS は、NASA Ames Research Center のために Sterling Software 社が開発した Network Queuing System です。

■SAP ERP, SAP NetWeaver BW および ABAP は、SAP AG の登録商標または商標です。

■Amazon Web Services およびその他の AWS 商標は、Amazon.com, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標です。

■iPad, iPadOS および Safari は、米国およびその他の国で登録された Apple Inc. の商標です。

■iOS は、Apple Inc. のOS名称です。IOS は、Cisco Systems, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標であり、ライセンスに基づき使用されています。

■Docker は、米国およびその他の国で登録された Docker, Inc. の登録商標または商標です。

■Firefox は、Mozilla Foundation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

■UiPath は、UiPath 社の米国およびその他の国における商標です。

■Box, boxロゴは、Box, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

■その他、本書に記載されているソフトウエア製品およびハードウエア製品の名称は、関係各社の登録商標または商標です。

なお、本書内では、R、TM、cの記号は省略しています。

本マニュアルでは、製品名およびサービス名を次のように略称表記しています。

略称	製品名・サービス名
Office	Microsoft Office
Excel	Microsoft Excel
Azure	Microsoft Azure
Internet Explorer	Internet Explorer 11
Firefox	Mozilla Firefox
AWS	Amazon Web Services
EC2	Amazon Elastic Compute Cloud
EBS	Amazon Elastic Block Store
S3	Amazon Simple Storage Service
ELB	Elastic Load Balancing
CloudFormation, CF	AWS CloudFormation
CloudWatch, CW	Amazon CloudWatch
RDS	Amazon Relational Database Service
Glue	AWS Glue
Lambda	AWS Lambda
EKS	Amazon Elastic Kubernetes Service
ECS	Amazon Elastic Container Service
STS	AWS Security Token Service
CloudWatch Logs	Amazon CloudWatch Logs
SNS	Amazon Simple Notification Service

輸出する際の注意事項

本製品（ソフトウエア）は、外国為替令に定める提供を規制される技術に該当いたしますので、日本国外へ持ち出す際には日本国政府の役務取引許可申請等必要な手続きをお取りください。許可手続き等にあたり特別な資料等が必要な場合には、お買い上げの販売店またはお近くの当社営業拠点にご相談ください。

はじめに

本書は、運用中のJobCenterを別の新環境に移行する手順について横断的に説明しています。

本書の内容は将来、予告なしに変更する場合があります。あらかじめご了承下さい。

1. マニュアルの読み方

■本バージョンにおける新規機能や変更事項を理解したい場合

→ <スタンダードモード用リリースメモ>を参照してください。

■JobCenterを新規にインストール、またはバージョンアップされる場合

→ <セットアップガイド>を参照してください。

■JobCenterを初めて利用される場合

→ <セットアップガイド>を参照してください。

■JobCenterの基本的な操作方法を理解したい場合

→ <スタンダードモード用基本操作ガイド>を参照してください。

■JobCenterの動作を制御する設定やネットワーク関連の設定を理解したい場合

→　ジョブ管理マネージャ(MG)機能の設定については<スタンダードモード用環境構築ガイド>を参照してください。

→　ジョブ実行エージェント(AG)機能の設定については<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>を参照してください。

■JobCenterの操作をコマンドラインから行う場合

→ <スタンダードモード用コマンドリファレンス>を参照してください。

■JobCenterのイベントログ出力方法など監視に関連した機能を理解したい場合

→ <スタンダードモード用環境構築ガイド>を参照してください。

■運用中のJobCenterを新環境に移行する場合

→ <スタンダードモード用移行ガイド>を参照してください。

■JobCenterのクラスタ環境を構築したい場合

→ <スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>を参照してください。

■ブラウザを用いたJobCenterの監視やWebAPIでの制御などWebに関連した機能を理解したい場合

→ <スタンダードモード用Web機能利用の手引き>を参照してください。

■その他機能についてお知りになりたい場合

→ 関連マニュアルの内容をお読みいただき、目的のマニュアルを参照してください。

2. 凡例

本書内での凡例を紹介します。

	気をつけて読んでいただきたい内容です。
	本文中の補足説明
	本文中のヒントとなる説明
注	本文中につけた注の説明
__	UNIX版のインストール画面の説明では、__部分(下線部分)はキーボードからの入力を示します。

3. 関連マニュアル

JobCenter に関するマニュアルです。JobCenter メディア内に格納されています。

最新のマニュアルは、JobCenter 製品サイトのダウンロードのページを参照してください。

https://jpn.nec.com/websam/jobcenter/download.html

【スタンダードモードのマニュアル】

資料名	概要
JobCenter セットアップガイド	JobCenterを新規にインストール、またはバージョンアップする場合の方法について説明しています。
JobCenter 基本操作ガイド	JobCenterの基本機能、操作方法について説明しています。
JobCenter 環境構築ガイド	JobCenterを利用するために必要なジョブ実行マネージャ環境の構築方法や設定方法の詳細、マネージャ環境の運用に役立つ機能について説明しています。
JobCenter ジョブ実行エージェント構築ガイド	JobCenterを利用するために必要なジョブ実行エージェント環境の構築方法や設定方法の詳細について説明しています。
JobCenter コマンドリファレンス	GUIと同様にジョブネットワークの投入、実行状況の参照などをコマンドラインから行うために、JobCenterで用意されているコマンドについて説明しています。
JobCenter クラスタ機能利用の手引き	クラスタシステムでJobCenterを操作するための連携方法について説明しています。
JobCenter Web機能利用の手引き	WebブラウザでジョブJobCenter CL/Webについて説明しています。
JobCenter 移行ガイド	運用中のJobCenterを別の新環境に移行する手順について横断的に説明しています。
JobCenter R16.2 リリースメモ	バージョン固有の情報を記載しています。

【クラシックモードのマニュアル】

資料名	概要
JobCenter インストールガイド	JobCenterを新規にインストール、またはバージョンアップする場合の方法について説明しています。
JobCenter クイックスタート編	初めてJobCenterをお使いになる方を対象に、JobCenterの基本的な機能と一通りの操作を説明しています。
JobCenter 基本操作ガイド	JobCenterの基本機能、操作方法について説明しています。
JobCenter 環境構築ガイド	JobCenterを利用するために必要な環境の構築、環境の移行や他製品との連携などの各種設定方法について説明しています。
JobCenter NQS機能利用の手引き	JobCenterの基盤であるNQSの機能をJobCenterから利用する方法について説明しています。
JobCenter コマンドリファレンス	GUIと同様にジョブネットワークの投入、実行状況の参照などをコマンドラインから行うために、JobCenterで用意されているコマンドについて説明しています。
JobCenter クラスタ機能利用の手引き	クラスタシステムでJobCenterを操作するための連携方法について説明しています。
JobCenter SAP機能利用の手引き	JobCenterをSAPと連携させるための方法について説明しています。
JobCenter WebOTX Batch Server連携機能利用の手引き	JobCenterをWebOTX Batch Serverと連携させるための方法について説明しています。

資料名	概要
JobCenter Web機能利用の手引き	Webブラウザ上でジョブ監視を行うことができるJobCenter CL/Webについて説明しています。
JobCenter クラスタ環境でのバージョンアップ・パッチ適用ガイド	クラスタ環境で運用しているJobCenterのアップデート、パッチ適用手順を説明しています。
JobCenter 運用・構築ガイド	JobCenterの設計、構築、開発、運用について横断的に説明しています。
JobCenter 移行ガイド	運用中のJobCenterを別の新環境に移行する手順について横断的に説明しています。
JobCenter コンテナガイド	JobCenterをコンテナ環境で構築・運用する方法について説明しています。
JobCenter R16.2 リリースメモ	バージョン固有の情報を記載しています。

【共通のマニュアル】

資料名	概要
JobCenter 操作・実行ログ機能利用の手引き	JobCenter CL/Winからの操作ログ、ジョブネットワーク実行ログ取得機能および設定方法について説明しています。
JobCenter Helper機能利用の手引き	Excelを用いたJobCenterの効率的な運用をサポートするJobCenter Definition Helper (定義情報のメンテナンス)、JobCenter Report Helper (帳票作成)、JobCenter Analysis Helper (性能分析)の3つの機能について説明しています。
JobCenter テキスト定義機能の利用手引き	JobCenterの定義情報をテキストファイルで定義する方法について説明しています。
JobCenter 拡張カスタムジョブ部品利用の手引き	拡張カスタムジョブとして提供される各部品の利用方法について説明しています。

4. 改版履歴

版数	変更日付	項目	形式	変更内容
1	2023/06/23	新規作成	－	第1版
2	2023/09/15	修正	－	R16.2.1リリースに伴い版改訂
3	2024/05/24	修正	－	R16.2.2リリースに伴い版改訂

目次

はじめに iv
1. マニュアルの読み方 v
2. 凡例 vi
3. 関連マニュアル vii
4. 改版履歴 ix
1. 実施する移行作業と作業手順の概要 1
2. 異なるマシンに定義データを移行する 2
2.1. 環境移行の種類 3
2.2. 異なるマシンへユーザ定義データを移行する 4
2.2.1. 定義データのダウンロード 4
2.2.2. 定義データ内のホスト名変更（移行先ホスト名が異なる場合） 5
2.2.3. 定義データのアップロード 7
2.3. ホスト名を変更する 8
2.3.1. ホスト名の変更 9
2.3.2. マシンIDの変更作業 12
2.4. 本番環境での確認作業 14
3. クラシックモードからスタンダードモードに移行する 15
3.1. 移行対象の情報と対処の概要 16
3.1.1. モード移行のパターンについて 16
3.1.2. 構成情報の移行概要 17
3.1.3. 定義情報の移行概要 20
3.2. 移行元作業 21
3.2.1. 構成情報の取得 21
3.2.2. 定義情報のダウンロード 25
3.3. 移行先作業 28
3.3.1. JobCenterの構築 28
3.3.2. 構成情報の移行 29
3.3.3. 定義情報の移行 51

表の一覧

3.1. ファイルコピーによるバックアップ対象のファイル 22
3.2. WOBS連携設定の移行先におけるファイルパス 50

1. 実施する移行作業と作業手順の概要

本書での「移行」とは大きく分けて以下の2つを指します。

1. 旧マシンから新マシンに定義情報、構成情報を移行する（モードの変更は行わない）

2. クラシックモードからスタンダードモードに移行する

JobCenter　R16.2から、インストール時にクラシックモードかスタンダードモードを選択できるようになっています。

クラシックモードとスタンダードモードでは保持する情報の種類やフォーマットに差があるため、クラシックモードからスタンダードモードに移行するには作業が必要です。

これから行おうとしている移行作業がどちらなのかによって、適切な章を参照してください。

また、このマニュアルでは、「JobCenterがインストールされているマシンのホスト名を変更する」際に必要な作業も記載しています。そのような場合に必要な作業については「2.3　ホスト名を変更する」を参照してください。

■以下のような場合は2章 「異なるマシンに定義データを移行する」 を参照してください。

- R16.1以前で構築されているマシン（クラシックモード相当）から、R16.2のクラシックモードで構築する別のマシンに移行する場合
- R16.2のクラシックモードで構築されているマシンから、R16.2で構築する別のマシンに移行する場合

■以下のような場合は3章 「 クラシックモードからスタンダードモードに移行する 」 を参照してください。

- R16.1以前で構築されているマシン（クラシックモード相当）から、R16.2のスタンダードモードにアップグレードする場合
- R16.1以前で構築されているマシン（クラシックモード相当）から、R16.2のスタンダードモードで構築する別のマシンに移行する場合
- R16.2のクラシックモードで構築したマシンで、R16.2のスタンダードモードで構築し直す場合
- R16.2のクラシックモードで構築したマシンから、R16.2のスタンダードモードで構築する別のマシンに移行する場合

2. 異なるマシンに定義データを移行する

本章では環境移行の方法と注意点について説明します。

2.1. 環境移行の種類

本章で説明する環境移行の種類としては、以下の2パターンがあります。

1. 異なるマシンへユーザ定義データを移行する

   ジョブネットワーク定義やスケジュール定義、起動トリガ定義、監視対象テキストログ 、稼働日カレンダ定義、カスタムジョブ定義を異なるマシンへ移行する場合です。

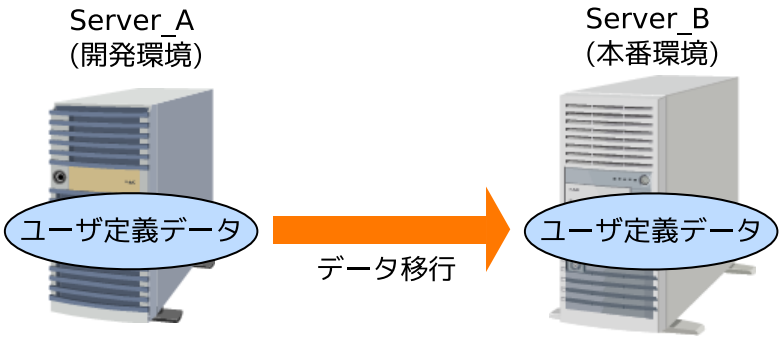


図2.1 異なるマシンへの移行

例えば、開発環境で作成・検証を行ったJNWやスケジュールなどの定義データを、本番環境など異なるマシンへ移行したい場合を想定します。この場合、移行先のホスト名やユーザ名は異なっても構いませんが、ホスト名が異なる場合には定義データ内のホスト名の変更作業が必要になります。

2. ホスト名を変更する

   物理サーバのホスト名が変更になる場合や、クラスタの場合の仮想ホスト名（クラスタサイト名）が変更になる場合です。

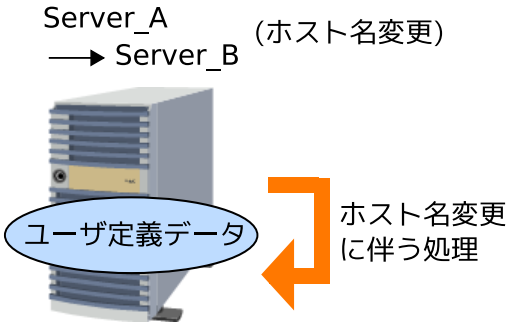


図2.2 ホスト名の変更

例えば、サーバの移設等によりホスト名を変更せざるを得ない場合などを想定します。この場合、直接的なユーザ定義データの移行は発生しませんが、マシン名や場合によってはマシンIDの変更、また、ホスト名変更に伴うユーザ定義データの変更作業が必要になります。

JobCenterではFQDNを意識して動作するため、ネットワークの変更等でドメインのサフィックスのみが変更になる場合でも、本章で説明する作業が必要になります。

2.2. 異なるマシンへユーザ定義データを移行する

開発環境で作成・検証を行ったJNWやスケジュールなどの定義データを、本番環境など異なるマシンへ移行したい場合を想定しています。

移行できるユーザ定義データは以下の6種類です。

■ジョブネットワーク定義

■スケジュール定義

■起動トリガ定義

■監視対象テキストログ

■稼働日カレンダ定義

■カスタムジョブ定義

■ユーザ環境設定、システム環境設定、パーミッション設定などの構成情報については移行できませんので、移行先のマシンにおいて別途設定する必要があります。

■トラッカやトラッカアーカイブデータについては移行できません。

移行する際、移行先のホスト名やユーザ名は異なっても構いませんが、ホスト名が異なる場合には定義データ内のホスト名の変更作業が必要になります。

以下の図は、異なるマシンへ定義データを移行する場合の作業の流れについて表したものです。

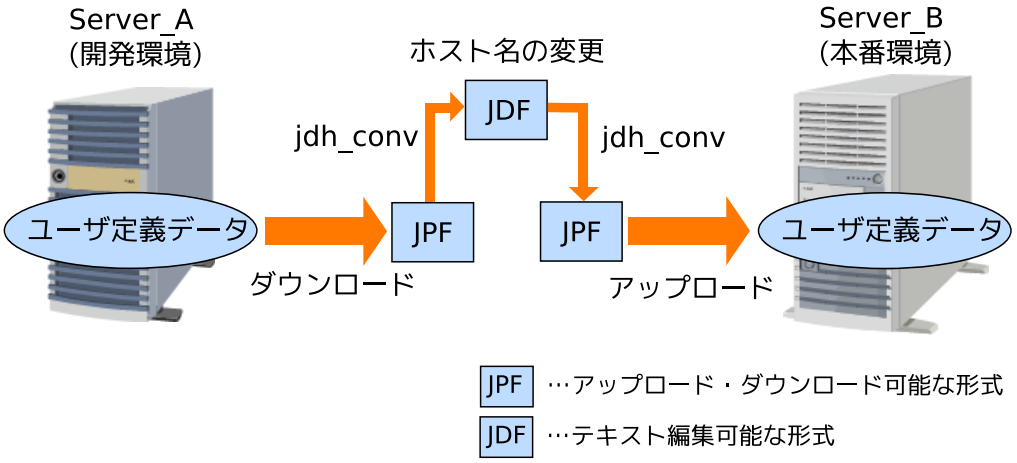


図2.3 異なるマシンへの移行

以降で、実際の移行手順について説明します。

2.2.1. 定義データのダウンロード

移行元のマシンから定義データをダウンロードします。ダウンロードしたデータはJPFファイルという形式で保存されます。

■ダウンロードは定義データを持つユーザ毎に行ってください。管理者ユーザで操作する場合に限り、一括で全ユーザの定義をダウンロードする事が可能です。

■稼働日カレンダ定義とカスタムジョブ定義についてはシステム共通の定義データであり、特にユーザの区別はありませんが、移行先のマシンにアップロードできるのはJobCenter管理者のみとなるため、これら2つの定義データについてはJobCenter管理者ユーザで作業を行うようにしてください。

定義データのダウンロード方法については<スタンダードモード用基本操作ガイド>の「11.1　定義情報/構成情報/トラッカアーカイブ情報(JPFファイル)ダウンロード」を参照してください。

2.2.2. 定義データ内のホスト名変更（移行先ホスト名が異なる場合）

移行先のホスト名が異なる場合、ダウンロードしたデータの更新が必要になる場合があります。移行先のホスト名が一致している場合には必要ありませんので、本手順はスキップし「2.2.3　　定義データのアップロード」へ進んでください。

2.2.2.1. ホスト名の自動変換が可能なパラメータ

以下で説明するパラメータは、JPFファイルのアップロード時にホスト名の変換ルールを指定する事で、自動的にホスト名変換を行うことが可能です。以下のパラメータに使用されているホスト名のみを変更する場合、本手順はスキップし「2.2.3　　定義データのアップロード」へ進んでください。その場合、移行先のサーバにアップロードを行う際に、ホスト名の変換ルールを設定して変換を行ってください。

■ジョブネットワークパラメータ - デフォルト投入キュー

■単位ジョブパラメータ - 投入キュー

■カスタムジョブ部品パラメータ - 投入キュー

■WOBSジョブパラメータ - 投入キュー

■カスタムジョブ定義パラメータ - 投入キュー

2.2.2.2. ホスト名の手動変換が必要なパラメータ

以下のパラメータは、JPFファイルのアップロード時にホスト名変換が行われないパラメータです。これらのパラメータを設定してる場合には、定義データ内のホスト名の手動更新が必要になる場合があります。各パラメータの説明を確認し、更新を行う場合には「2.2.2.3 ホスト名の手動変更」の手順を実施してください。

■WOBSジョブパラメータ - バッチドメインエージェント:ホスト名

WOBSジョブの接続先バッチドメインエージェイントのホスト名（またはIPアドレス）です。自ホスト名を指定している場合には、移行先の環境で正しく動作するように変更が必要になります。

リモートホストを指定している場合には、必要に応じて変更してください。

■ERPジョブパラメータ - 実行ホスト

実行ホスト名は「<ホスト名>_<SAPシステム名>_<SAPシステム番号>」の形式で指定します。自ホスト名を指定している場合には、移行先の環境で正しく動作するように変更が必要になります。

リモートホストを指定している場合には、必要に応じて変更してください。

上記以外にも、ジョブネットワークやスケジュールのコメント、単位ジョブのスクリプトなど、任意の文字列を入力可能なものについてはホスト名が入る可能性がありますが、それらについては記載していません。

ただし、ジョブのスクリプトなど、ホスト名の変更が行われていないと正しく動作しないことがわかっている場合には、以降で説明するデータ更新作業で変更することが可能ですので、必要に応じて変更を行ってください。

JPFはサーバとのやりとりするための形式です。JPFを専用コマンド（jdh_conv）で変換すると、テキスト形式のフォーマット（JDF）が定義データごとに生成されます。それらJDFの中身を更新することで必要部分のホスト名の変更を行います。

テキスト定義機能の詳細については<テキスト定義機能の利用手引き>にまとめていますので、そちらを参照してください。

2.2.2.3. ホスト名の手動変更

ダウンロードした定義データ内のホスト名を、手動で変更する手順について説明します。

1. JPF形式をJDF形式に変換する

   JPFからJDFへの変換には以下のコマンドを実行します。

   ■UNIX版

   ```
   /usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_conv -x [-o $output] [$JPFFile]
   ```

   ■Windows版

   ```
   %InstallDirectory%\bin\jdh_conv -x [-o $output] [$JPFFile]
   ```

   以下にUNIX環境での実行例を記載します。

   ```
   /usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_conv -x def_jobmanager01_20170512180000.jpf ↵
   Output JDFs to "jpf_20170512183000/jpf".
   ```

   コマンドが成功するとカレントディレクトリにディレクトリが作成され、JDF形式のファイルが展開されます。

   ■展開先のディレクトリを指定することも可能です。コマンドの詳細および展開したJPFファイル内のディレクトリ構成については<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.20 jdh_conv JDFファイルとJPFファイルの相互変換」を参照してください。

2. ホスト名の変更

   1で展開したJDF形式のファイル（xxxx.jdf）はテキスト形式のファイルとなっています。これらについて、任意のテキストエディタやツール等を用いて必要なホスト名の変更作業を行ってください。

3. JDF形式からJPF形式への変換

   更新したJDF形式のファイルをJPF形式に圧縮して、サーバとやりとりできる形式に戻します。

   JDFからJPFへの変換には以下のコマンドを実行します。

   ■UNIX版

   ```
   /usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_conv [-o $output] [$JDFFile ...]
   ```

   ■Windows版

   ```
   %InstallDirectory%\bin\jdh_conv [-o $output] [$JDFFile ...]
   ```

   JDFファイルの更新を行ったかどうかに関わらず、必ず全てのJDFファイルを指定してjdh_convコマンドを実行してください。指定しない場合、その種類のデータは移行先に持っていくJPF内に含まれないことになりますので注意してください。

以下にUNIX環境での実行例を記載します。

```
/usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_conv jnw.jdf sched.jdf trg.jdf wkcal.jdf customjob_template.jdf
 operation.jdf ↵
JPF file "jc_def_20170512190000.jpf" conversion successfully.
```

コマンドが成功するとカレントディレクトリにJPFファイルが作成されます。

出力先のファイル名を指定することも可能です。詳細については<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.20 jdh_conv JDFファイルとJPFファイルの相互変換」を参照してください。

オプションのJDFファイル指定にoperation.jdfは必要です。

2.2.3. 定義データのアップロード

移行先のマシンへ定義データ（JPFファイル）をアップロードします。

■アップロードは、移行先マシンで定義データを持たせたいユーザ毎に行ってください。

■最初に必ず、稼働日カレンダ定義、カスタムジョブ定義を含むJPFを、JobCenter管理者ユーザでアップロードしてください。一般ユーザではこれら2つの定義データは更新されません（JPFに含んでいても、移行先のサーバにはアップロードはされません）。そのため、これら2つの定義と依存性のあるジョブネットワーク定義やスケジュール定義を一般ユーザで先にアップロードしようとすると、移行先サーバにそのデータが無い状態ではエラーとなります。

なお、稼働日カレンダやカスタムジョブを利用していない場合にはこの限りではありません。

■「2.2.2.1 ホスト名の自動変換が可能なパラメータ」 に一覧されているパラメータのホスト名変換を行う場合、ホスト名の変換ルールを指定してください。

定義データのアップロード方法については<スタンダードモード用基本操作ガイド>の「11.1 定義情報/構成情報/トラッカアーカイブ情報(JPFファイル)ダウンロード」を参照してください。

2.3. ホスト名を変更する

ここではホスト名を変更する際に必要となる作業について説明します。またホスト名の変更だけでなく、それに伴い合わせて発生する可能性のある作業についても説明します。

■以下の手順ではOSのhostnameを「ホスト名」、JobCenterに登録されているローカルサイトやクラスタサイトのサイト名を「マシン名」として区別しています。

■他のマシンのマシン一覧に登録されているマシンのホスト名やクラスタサイト名の変更を行う場合は、事前に他のマシンのマシン一覧から一旦削除してから変更してください。

■ホスト名を変更する

ホスト名を変更する場合、自マシンのマシンリストの登録内容を変更するだけでなく、連携先の他のMGのマシンリストに登録されている対象マシンを再登録する必要があります。

またユーザ定義データの変換作業が必要になります。

以下の場合はそれぞれの設定ファイル内のホスト名設定を変更内容に合わせて設定しなおしてください。

- 環境変数NATS_URLにホスト名を明示的に指定（nats://[ホスト名]:23141）している場合

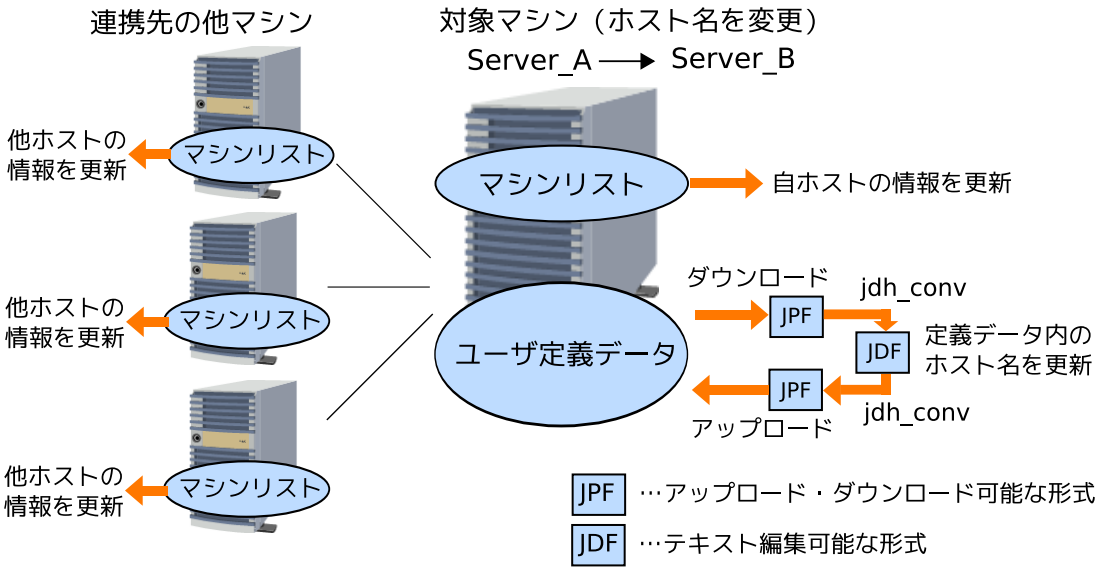


図2.4 ホスト名の変更

■マシンIDを変更する

マシンIDを変更する場合、自マシンのマシンIDを変更するだけでなく、連携先の他のMGのマシンリストに登録されている対象マシンを再登録する必要があります。

なお、マシンIDのみを変更してホスト名を変更しない場合には、ユーザ定義データの変換は不要です。

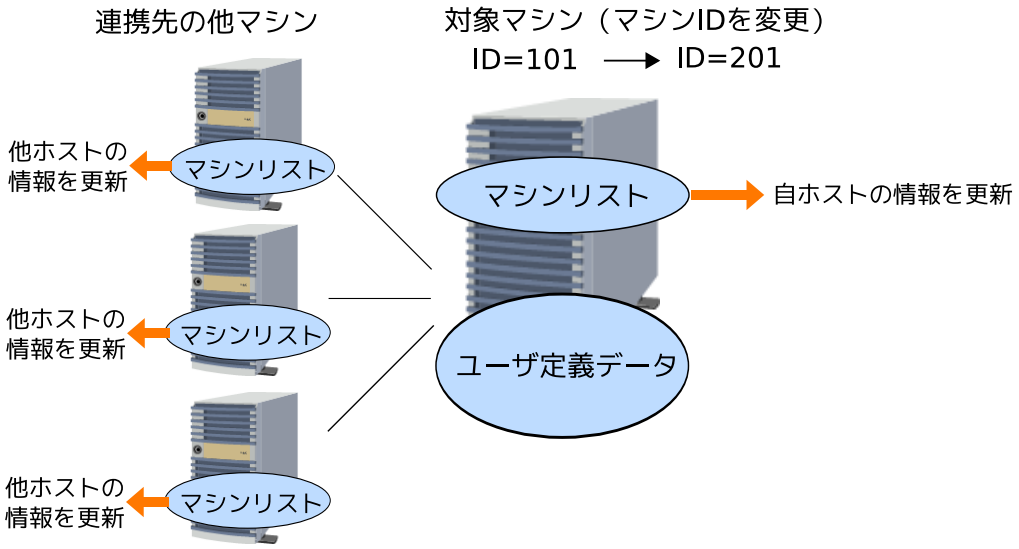


図2.5 マシンIDの変更

■IPアドレスを変更する

IPアドレスのみ変更するときは、JobCenter側で設定を変更する必要はありません。ただし、必ずOSのネットワーク設定で名前解決の正引き、および逆引きができるようにしておいてください。

以下の場合はそれぞれの設定ファイル内のIPアドレス設定を変更内容に合わせて設定しなおしてください。

- daemon.confに利用IPアドレスを明示的に指定（ipaddress=xx.xx.xx.xx）している場合
- JobCenterで名前解決の調整のためresolv.defファイルを設定している場合
- 環境変数NATS_URLにIPアドレスを明示的に指定（nats://xx.xx.xx.xx:23141）している場合

以下では、ホスト名を変更する場合とマシンIDを変更する場合のそれぞれについて詳細を説明します。

2.3.1. ホスト名の変更

テスト環境から本番環境へのマシン移設などでホスト名に変更がある場合、以下のようにJobCenterのマシン名設定変更やデータ変換作業を行います。変更作業の前にjc_checkコマンドでシステム情報を採取して、現状の設定状況を必ず保存しておくようにします。

なお、nmapmgrの詳細については<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.12　nmapmgr　ネットワークの構成管理」を参照してください。

2.3.1.1. 他ホスト名の登録内容を変更

マシンアイコンに登録されている他ホストのマシン名を自マシン上で変更する場合、以下のように変更を行います。

ホスト名を変更する場合、変更後のホスト名はシステム内で関連する全てのJobCenterインストールマシンで正しく名前解決できている必要があります。

（例）UNIXにrootユーザでログインしたターミナルで、ローカルサイトにマシンID=111で登録されているhost1のマシン名をhost2に変更する

```
# nmapmgr ↵
NMAPMGR>: change name 111 host2 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
```

```
NMAPMGR>: exit ↵
#
```

（例）WindowsにJobCenter管理者でログオンして、コマンドプロンプトから、クラスタサイトcluseter2にマシンID=1002で登録されているhost1のマシン名をhost2に変更する

```
> set NQS_SITE=cluster2 ↵
> nmapmgr ↵
NMAPMGR>: change name 1002 host2 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: exit ↵
>
```

クラスタサイトの場合は、必ずnmapmgr起動前に環境変数NQS_SITEにクラスタサイト名を設定します。ローカルサイトの設定変更の場合はNQS_SITEは設定しないでください。

2.3.1.2. 自ホスト名の登録内容を変更

自マシン名を変更する場合、以下のように変更を行います。

ホスト名を変更する場合、変更後のホスト名はシステム内で関連する全てのJobCenterインストールマシンで正しく名前解決できている必要があります。

■自マシン名を変更する場合には、JobCenterを停止した状態で行ってください。

■他ホスト名の変更のみで自ホスト名を変更しない場合は、この作業を行う必要はありません。

■以下の作業は途中で中止することはできません。もし途中で作業を中止した場合、JobCenterが正常に起動できなくなりますのでご注意ください。

■Windowsドメイン参加済みでホスト名を変更する場合や、ホスト名変更とWindowsドメイン参加を併せて行う場合は、以下の手順で作業してください。

1. ホスト名を変更しWindowsドメインから離脱（Windowsドメイン参加済みの場合）／ホスト名を変更（Windowsドメイン参加前の場合）
2. 本手順に沿って自ホスト名の登録内容を変更
3. Windowsドメインに参加

JobCenterでは、localinfoファイルに自マシンのNQSのマシンIDとマシン名を保存しています。

自ホスト名を変更する場合、JobCenterが自マシンを認識するlocalinfoファイルにも変更を反映する必要があります。

localinfoは次のパスにあります。ただしテキストエディタ等で直接編集すると、正常に動作しなくなりますのでご注意ください。

UNIX	/usr/spool/nqs/nmap/localinfo
Windows	%InstallDirectory%\spool\nmap\localinfo

クラスタ環境の場合は /usr/spool や %InstallDirectory% の部分を、cjcmksiteでサイト構築時に指定した <JobCenterDBパス>に読み替えてください。

なお%InstallDirectory%はWindows版JobCenterのインストールディレクトリで、デフォルトはC:\JobCenter\SVになります。

自ホスト名を変更し、localinfoファイルに変更を反映する例は以下のとおりです。

（例）UNIXにrootユーザでログインしたターミナルで、マシンID=100で登録されているローカルサイトhost1の自マシン名をhost2に変更する

```
# nmapmgr ↵
NMAPMGR>: change name 100 host2 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: set local name host2 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: exit ↵
#
```

（例）WindowsにJobCenter管理者でログオンして、コマンドプロンプトから、マシンID=1001で登録されているクラスタサイトcluster1.co.jpの自マシン名をcluster2.co.jpに変更する

```
> set NQS_SITE=cluster1.co.jp ↵
> nmapmgr ↵
NMAPMGR>: change name 1001 cluster2.co.jp ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: set local name cluster2.co.jp ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: exit ↵
>
```

クラスタサイトの場合は、必ずnmapmgr起動前に環境変数NQS_SITEにクラスタサイト名を設定します。ローカルサイトの設定変更の場合はNQS_SITEは設定しないでください。

自ホスト名を変更した後はJobCenterを再起動して、CL/Winで変更後のマシン名で接続できることを確認してください。

2.3.1.3. 定義データの更新

ホスト名を変更した場合、定義データ内に含まれるホスト名の変換が必要になります。これは実際にパラメータとして含まれるホスト名だけではなく、JobCenter内部のDBに格納されているデータも含むため、ジョブネットワークのパラメータなどに明示的にホスト名を含む値（デフォルト投入キューなど)を設定していなくても必要になります(明示的に指定していない場合は、以下の手順1と3のみが必要で、手順2は不要です）。

定義データ内のホスト名の変更方法については、以下を参照して行ってください。なお、参照先では異なるマシンへの移行方法として記載しますが、移行元/移行先のサーバが物理的には同一であり、ホスト名変更している、として読み替えてください。

1. 定義データのダウンロード

   サーバから全定義データをJPF形式でダウンロードします。定義データをもつ全ユーザ分行ってください。管理者ユーザで操作する場合に限り、一括で全ユーザの定義をダウンロードする事が可能です。

2. 定義データ内のホスト名変更

   必要に応じて、定義データ内のホスト名の変更を行います。パラメータ内にホスト名を含む値を設定していなければ変更は不要です。どのようなパラメータが該当するかについては上記リンク先を参照してください。

3. 定義データのアップロード

   JPFをアップロードしてサーバ上の定義データを更新します。全ユーザ分行ってください。変更後のホスト名に対応した形で上書き更新されます。

2.3.2. マシンIDの変更作業

MGのマシンIDを誤って登録してしまった場合や、他のMGのマシンとIDが重複してしまい、MGのマシンIDの割り当てを変更したい場合、以下の手順で変更作業を行います。

マシンIDのみ変更してホスト名の変更は行わない場合は、定義データの更新作業は不要です。

なおnmapmgrの詳細については<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.12 nmapmgr ネットワークの構成管理」を参照してください。

2.3.2.1. 他マシンIDの登録内容を変更

マシンアイコンに登録されている他ホストのマシンIDを自マシン上で変更する場合、以下のように変更を行います。

（例）UNIXにrootユーザでログインしたターミナルで、ローカルサイトにマシンID=110で登録されている他のマシン名host1のマシンIDを200に変更する

```
# nmapmgr ↵
NMAPMGR>: delete mid 110 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: add mid 200 host1 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: exit ↵
#
```

（例）WindowsにJobCenter管理者でログオンして、コマンドプロンプトから、クラスタサイトcluseter1にマシンID=110で登録されているhost1のマシンIDを200に変更する

```
> set NQS_SITE=cluster1 ↵
> nmapmgr ↵
NMAPMGR>: delete mid 110 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: add mid 200 host1 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: exit ↵
>
```

クラスタサイトの場合は、必ずnmapmgr起動前に環境変数NQS_SITEにクラスタサイト名を設定します。ローカルサイトの設定変更の場合はNQS_SITEは設定しないでください。

2.3.2.2. 自マシンIDの登録内容を変更

マシンアイコンに登録されている自ホストのマシンIDを自マシン上で変更する場合、JobCenterを事前に停止してから以下のように変更を行います。

この場合、localinfoファイルへの変更反映とマシングループの初期化を同時に行う必要があります。また、作業を途中で中止することはできません。もし途中で作業を中止した場合、JobCenterが正常に起動できなくなりますのでご注意ください。

（例）UNIXにrootユーザでログインしたターミナルで、マシンID=101で登録されているローカルサイトhost2.co.jpの自マシンIDを201に変更する

```
# nqsstop ↵
# nmapmgr ↵
NMAPMGR>: delete mid 101 ↵
```

```
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: add mid 201 host2.co.jp ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: set local name host2.co.jp ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: exit ↵
# nqsstart ↵
#
```

（例）WindowsにJobCenter管理者でログオンして、コマンドプロンプトから、マシンID=1001で登録されているクラスタサイトcluster2.co.jpの自マシンIDを2001に変更する

```
> cjcpw -stop cluster2.co.jp ↵
> set NQS_SITE=cluster2.co.jp ↵
> nmapmgr ↵
NMAPMGR>: delete mid 1001 ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: add mid 2001 cluster2.co.jp ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: set local name cluster2.co.jp ↵
NMAP_SUCCESS: Successful completion.
NMAPMGR>: exit ↵
> cjcpw cluster2.co.jp d:\jcdb ↵
>
```

クラスタサイトの場合は、必ずnmapmgr起動前に環境変数NQS_SITEにクラスタサイト名を設定します。ローカルサイトの設定変更の場合はNQS_SITEは設定しないでください。

自ホスト名を変更した後はJobCenterを再起動して、CL/Winで変更後のマシン名で接続できることを確認してください。

2.4. 本番環境での確認作業

実際にジョブネットワークの即時実行やスケジュール投入を行い、問題なく動作することを確認してください。

ホスト名が不正な状態になってしまっている場合、正常に実行されなかったり、スケジュール投入されなかったりする場合があります。設定内容を採取するjc_checkコマンドを利用して、設定内容や整合性に問題がないか確認してください。

jc_checkコマンドの詳細については<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「7.1 jc_check JobCenterの設定環境を確認」を参照してください。

3. クラシックモードからスタンダードモードに移行する

本章では、クラシックモードからスタンダードモードに移行する手順について説明します。

クラシックモードからスタンダードモードに移行する場合、実行基盤が異なるため、一部の情報は引き継ぐことができません。

そのため、移行元の設定を移行先にそのまま再設定したり、移行元のファイルを移行先にコピーしたりすることで引き継ぎができるデータと、移行元の設定を参考にして、移行先で新たに環境の構築が必要となる引き継ぎができないデータが存在することになります。

本章では、引き継ぎができるデータ、引き継ぎができないデータそれぞれで、どのような手段で移行するのか、どのような手段で新たな構築を行うのかを説明します。

また、本章での説明はMGのクラシックモードからスタンダードモードへの移行方法です。MGと連携していたSVについては、スタンダードモード（AG）への引継ぎ、移行はできません。移行先環境のAGについては、MGの一部設定の移行作業に伴い、AGを新規に構築するといった作業を行います。

AGの構築方法は<セットアップガイド>の6章　「JobCenter　AGをインストールする」　および<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>を参照してください。

移行元のJobCenter　SV環境は、クラシックモードまたは下位バージョンのMGとの連携に用いない場合、AGへの移行検証後にアンインストールすることを推奨します。

JobCenter　　SVのアンインストールの詳細は<クラシックモード用インストールガイド>の「4.2 JobCenter MG, JobCenter SVをアンインストールする」を参照してください。

3.1. 移行対象の情報と対処の概要

本節では、移行対象の情報とその情報に対する作業の概要について説明します。実際の作業手順については、「3.2 移行元作業 」、「3.3 移行先作業 」を参照してください。

移行対象の情報は大きく分けて2種類あります。

■構成情報

キュー、ユーザ環境設定、システム環境設定、ユーザマッピングといった全ユーザーで共通の情報

■定義情報

ジョブネットワーク、スケジュールといった各ユーザーが持つ情報

このうち、構成情報はクラシックモードからスタンダードモードへの移行によって、ファイルコピーや同じ値の設定で引き継ぎができるもの、引き継ぎができず新たに構築が必要なものに分かれます。

定義情報は一部パラメータの修正によって大部分を移行することができます。

また、移行するJobCenter MGを移行元と同じマシンにインストールするか、異なるマシンにインストールするかで移行対象の情報が異なります。

移行対象の情報の内容については、「3.1.1　モード移行のパターンについて」を参照し、移行パターンを選択して内容を確認してください。

3.1.1. モード移行のパターンについて

クラシックモードからスタンダードモードに移行するパターンは以下の2つです。

どちらのパターンかによって移行に必要な作業が異なります。

■移行元、移行先のマシンが異なる場合

たとえば、以下のようなパターンです。

- R16.1以前のバージョンがインストールされているマシン（クラシックモード相当）から、別のマシンにR16.2以降のスタンダードモードで移行する場合
- R16.2以降のクラシックモードでインストールされているマシンから、別のマシンにスタンダードモードで移行する場合

このパターンの場合、それぞれ以下の作業が必要です。

- 構成情報

  引き継ぎができないデータおよび引き継ぎができるデータについて作業を行います。詳細は「3.1.2　構成情報の移行概要」、「3.1.2.2 引き継ぎができないデータの概要」および「3.1.2.3 引き継ぎができるデータの概要」を参照してください。

- 定義情報

  詳細は「3.1.3 定義情報の移行概要」を参照してください。

■移行元、移行先のマシンが同じ場合

たとえば、以下のようなパターンです。

- R16.1以前のバージョンがインストールされているマシン（クラシックモード相当）で、R16.2以降のスタンダードモードにバージョンアップする場合

- R16.2以降のクラシックモードでインストールされているマシンで、スタンダードモードで構築し直す場合

このパターンの場合、それぞれ以下の作業が必要です。

- 構成情報

  引き継ぎができないデータのみ作業を行います。詳細は「3.1.2 構成情報の移行概要」および「3.1.2.2 引き継ぎができないデータの概要」を参照してください。

- 定義情報

  詳細は「3.1.3 定義情報の移行概要」を参照してください。

3.1.2. 構成情報の移行概要

スタンダードモードへの移行において、構成情報は以下の2つに分かれます。

■引き継ぎができないデータ

キュー設定、マシン一覧などの引き継ぎができず再構築が必要なデータ

■引継ぎができるデータ

ユーザー一覧、デーモン設定などのファイルコピーや同じ値の設定で引き継ぎができるデータ

どちらのデータにおいても、構成情報の移行の基本的な流れは移行元のMGに存在する構成情報を取得し、移行先MGへ構成情報の引継ぎや再構築を行います。例外として、引継ぎができないデータのユーザマッピングについては、移行元MGだけでなく、連携しているSVにも構成情報が存在するため、移行元MG、連携しているSVそれぞれで構成情報を取得して移行先MGで再構築を行う必要があります。

各マシンにおける構成情報（引継ぎができないデータ）の移行イメージを下図に示します。

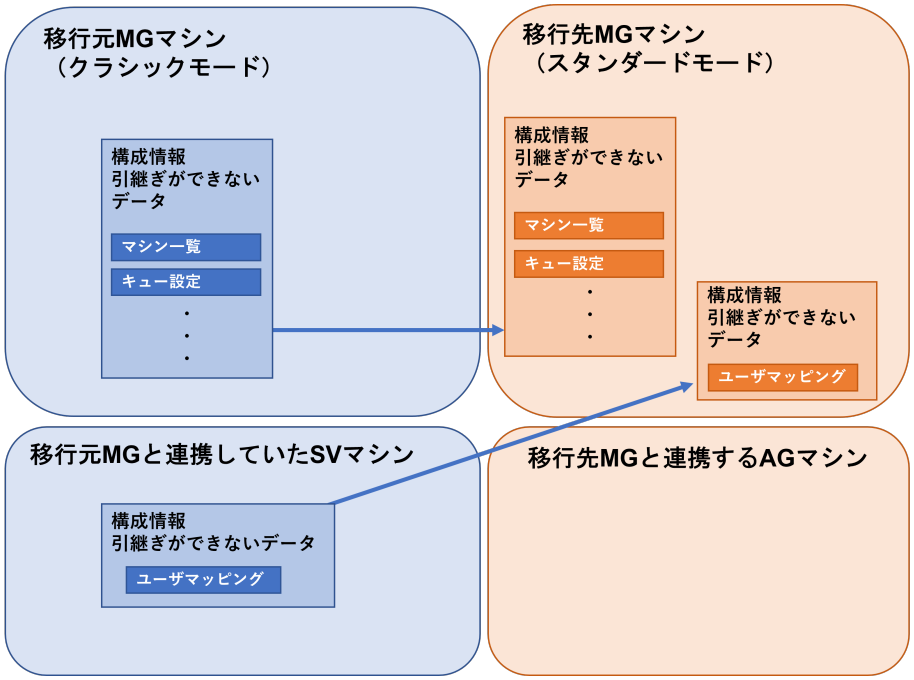


図3.1 構成情報（引継ぎができないデータ）の移行イメージ

ファイルコピーで引継ぎができる情報を除く構成情報の移行作業では、JobCenterが提供している以下の2つの機能を使用します。

■構成情報や定義情報をJPFという形式のファイルとしてエクスポートすることができる機能

■エクスポートしたJPFファイルを取り込み、構成情報や定義情報の内容をExcelで参照できるReport Helper

上記の機能を利用して、移行元環境で構成情報をJPFファイルでエクスポート、それをReport Helperで表示し、移行先で同じ値を設定して引き継ぎをしたり、移行元の設定を参考にして移行先で再構築を行います。

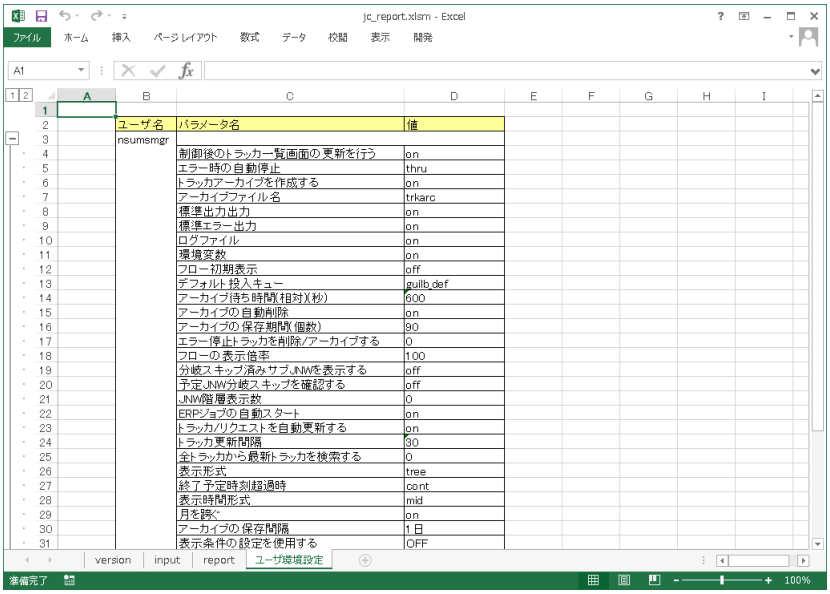
3.1.2.1. Report Helperによる構成情報の出力

JobCenterでは、エクスポートしたJPFファイルを取り込み、構成情報や定義情報の内容をExcelで参照できるReport Helperという機能を提供しています。

Report Helperの機能を利用して移行元の構成情報を確認し、引き継ぎできないデータについては再構築の際の参考に、引き継ぎできるデータについては同じ値を移行先に設定することに利用してください。

Report Helperの詳細については<Helper機能利用の手引き>の「3.1 概要」を参照してください。

Report Helperにて出力する帳票の例は以下になります。



ユーザ名	パラメータ名	値
nsumsmgr		
	制御後のトラッカー覧画面の更新を行う	on
	エラー時の自動停止	thru
	トラッカアーカイブを作成する	on
	アーカイブファイル名	trkarc
	標準出力出力	on
	標準エラー出力	on
	ログファイル	on
	環境変数	on
	フロー初期表示	off
	デフォルト投入キュー	guilib_def
	アーカイブ待ち時間(相対)(秒)	600
	アーカイブの自動削除	on
	アーカイブの保存期間(個数)	90
	エラー停止トラッカを削除/アーカイブする	0
	フローの表示倍率	100
	分岐スキップ済みサブJNWを表示する	off
	予定JNW分岐スキップを確認する	off
	JNW階層表示数	0
	ERPジョブの自動スタート	on
	トラッカリクエストを自動更新する	on
	トラッカ更新間隔	30
	全トラッカから最新トラッカを検索する	0
	表示形式	tree
	終了予定時刻超過時	cont
	表示時間形式	mid
	月を跨ぐ	on
	アーカイブの保存間隔	1日
	表示条件の設定を使用する	OFF

図3.2 ユーザ環境設定帳票シート

設定が必要な構成情報を以下に記述します。

3.1.2.2. 引き継ぎができないデータの概要

単純な移行ができないものや、移行元環境の設定値を確認しながら移行先環境でどのような設定にするかをお客様で検討して設定する手順が必要なものです。

名称	対象OS	概要
キュー設定	UNIX/Windows	移行元のキュー設定を参照しながら、新環境にどういうキューを作るのか、そのキューにどのようなパラメータを設定するのかを検討し、再構築を行ってください。
マシン一覧	UNIX/Windows	移行元のマシン連携設定を確認して、移行元のMG、SVを移行先ではMG、AGとして再構築してください。 移行元のマシン一覧には、MG、SVの両方が登録されています。再構築の際は、移行先のマシン一覧にはMGだけを登録し、AGは該当MGのエージェント一覧への登録を行います。

名称	対象OS	概要
ユーザマッピング	UNIX/Windows	構築したエージェントに対してOSユーザの追加、移行先MGでOSユーザ情報登録およびユーザマッピング追加を行います。
デフォルトパラメータ	UNIX/Windows	投入キューのホスト名部分をエージェント名に置換して設定しなおします。
スタンダードモードの設定ファイルに置き換わるパラメータ	UNIX/Windows	クラシックモードの設定パラメータのうち、スタンダードモードの設定ファイルに置き換わるパラメータがあります。詳細は「3.3.2.1.5 スタンダードモードの設定ファイルに置き換わるパラメータ」を参照してください。

3.1.2.3. 引き継ぎができるデータの概要

単純に移行元の設定ファイルをコピーしたり、移行元の設定値を流用して移行先に同じ値を設定するものです。主に以下の2パターンの作業を行います。

■移行元環境にて構成情報を取得し、Report Helperにて該当する帳票を出力して参照し、移行元の環境と同パラメータを移行先環境に設定します。

■移行元環境にて設定ファイル等の格納ディレクトリをバックアップし、移行先環境にコピーします。

3.1.2.3.1. 移行元と同じ値を設定して移行する情報

移行元環境にて構成情報を取得し、Report Helperにて該当する帳票を出力して参照し、移行元の環境と同パラメータを移行先環境に設定します。

対象は以下の構成情報になります。

名称	対象OS
ユーザ一覧	UNIX/Windows
ユーザ環境設定	UNIX/Windows
システム環境設定	UNIX/Windows
パーミッション設定	UNIX/Windows
デフォルトパラメータ	UNIX/Windows
イベント設定	Windows
エラーログファイルの設定	Windows
言語環境	UNIX
LDAPサーバ設定	Windows

3.1.2.3.2. ファイルコピーによる移行概要

移行元環境からファイルをバックアップし、移行先環境にコピーします。

対象は以下の構成情報になります。

名称	対象OS
デーモン設定	UNIX/Windows
イベント設定	UNIX
イベント定義	UNIX/Windows
エラーログファイルの設定	UNIX
WOBS連携設定（SVのみ）	UNIX/Windows
jcdbs設定	UNIX/Windows

名称	対象OS
jnwschprtコンフィグレーション	UNIX/Windows
SAP接続先設定	UNIX/Windows
jcres設定	UNIX/Windows
文字コード変換の設定	UNIX
.nsifrc	UNIX
名前解決設定	UNIX/Windows
サイトリスト	Windows
サイト設定	Windows
サーバ環境のマッピング情報	Windows
jcwebserver設定	UNIX/Windows
起動スクリプト	UNIX

3.1.3. 定義情報の移行概要

定義情報の移行は、以下のような手順で行います。

1. 移行元で、定義情報をJPFファイルとしてダウンロードする

2. 一部パラメータを修正する

3. 移行先で、修正した定義情報をJPFファイルとしてアップロードする

「異なるマシンでクラシックモードからスタンダードモードに移行する」、「同一マシンでJobCenterのバージョンアップ時にクラシックモードからスタンダードモードに移行する」のどちらのパターンでも一部パラメータの修正が必要です。

2のパラメータの修正には2通りの方法があります。

■JobCenterのテキスト定義機能を利用して、JPFファイルをJDFファイルに変換し、パラメータの修正を行う

■JobCenterのDefinition　Helper機能を利用して、JPFファイルをExcelに取り込み、Excelでパラメータの修正を行う

テキスト定義機能は標準機能ですが、Definition Helperは有償のオプション機能です。

テキスト定義機能を利用した方法では、JPFファイルをJDFというJobCenterの独自フォーマットに変換します。JDFファイルはテキスト形式であるため、テキストエディタ等を使って編集することができます。この機能を利用して、一部パラメータを修正します。

Definition　Helperを利用した方法では、JPFファイルを定義編集機能を備えたExcelファイルに取り込みます。Definition　HelperではExcelを利用して定義情報の内容や編集を行うことができます。この機能を利用して、一部パラメータを修正します。

Definition Helperの定義編集機能の詳細は<Helper機能利用の手引き>の「2.6 定義編集ツール機能詳細」を参照してください。

3.2. 移行元作業

ここでは移行に必要な情報の採取方法について記述します。

■移行元、移行先のマシンが異なる場合

- 構成情報

  移行元MGの構成情報の取得およびファイルのコピーによるバックアップを行います。ユーザマッピングの設定を移行する場合は、移行元MGと連携していたSVの構成情報の取得も行います。詳細は「3.2.1 構成情報の取得」および「3.2.1.3 ファイル類のバックアップ 」を参照してください。

- 定義情報

  詳細は「3.2.2 定義情報のダウンロード 」を参照してください。

■移行元、移行先のマシンが同じ場合

- 構成情報

  ファイルのコピーによるバックアップは不要であるため、移行元MGの構成情報の取得のみ行います。ユーザマッピングの設定を移行する場合は、移行元MGと連携していたSVの構成情報の取得も行います。詳細は「3.2.1 構成情報の取得」を参照してください。

- 定義情報

  詳細は「3.2.2 定義情報のダウンロード 」を参照してください。

3.2.1. 構成情報の取得

JobCenterの構成情報が含まれるJPFファイルを作成する方法について記述します。

下記のように取得したい構成情報によって手順が異なります。

■取得したい構成情報にユーザマッピングを含む場合

移行先作業にてユーザマッピングの設定を行う際、移行元環境のMGマシンと連携していたSVマシン上のユーザマッピングの設定情報が必要となります。そのため、移行元MGの構成情報および移行元MGと連携していたSVの構成情報を取得します。

手順については「3.2.1.1 移行元MGマシンの構成情報を取得」および「3.2.1.2 移行元MGマシンと連携していたSVマシンの構成情報を取得」を参照してください。

■取得したい構成情報にユーザマッピングを含まない場合

移行元MGの構成情報を取得します。

手順については「3.2.1.1 移行元MGマシンの構成情報を取得」を参照してください。

3.2.1.1. 移行元MGマシンの構成情報を取得

jc_backupコマンドによる構成情報を取得します。以下のフォーマットに従ってコマンドを実行してください。

jc_backupコマンドの詳細については、<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.17 jc_backup 構成情報のバックアップ」を参照してください。

環境変数NQS_SITEが設定されていない状態で実行してください。

UNIX版ではroot、Windows版ではJobCenter管理者ユーザで作業する必要があります。

OS	コマンド
UNIX	/usr/lib/nqs/gui/bin/jc_backup conf [-c $clusterdb] [-o $output]
Windows	%InstallDirectory%\bin\jc_backup conf [-c $clusterdb] [-o $output]

%InstallDirectory% は JobCenter のインストールディレクトリです。デフォルトは C:\JobCenter\SV になります。

パラメータ	説明
-c $clusterdb	クラスタ構成情報を取得する場合に、JobCenterのクラスタDBパスを指定します。 指定しない場合はローカル構成情報を取得します。
-o $output	出力ファイル名を指定します。 指定しない場合は、以下のファイル名で出力します。 ローカル構成情報の場合：jc_conf_local_YYYYMMDDhhmmss.jpf クラスタ構成情報の場合：jc_conf_cluster_YYYYMMDDhhmmss.jpf

■取得する構成情報については、<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「16.2.2　バックアップ・復元対象の構成情報」を参照してください。

■取得した構成情報は、Report Helperの帳票にて内容を確認できます。

Report Helperの詳細については、<Helper機能利用の手引き>の3章 「Report Helper」 を参照してください。

3.2.1.2. 移行元MGマシンと連携していたSVマシンの構成情報を取得

移行元MGマシンと連携していたSVマシンにて、jc_backupコマンドによる構成情報のバックアップを行います。

手順については「3.2.1.1 移行元MGマシンの構成情報を取得」を参照して、移行元MGマシンと同様の手順を移行元と連携していたSVマシン上で行ってください。

3.2.1.3. ファイル類のバックアップ

移行元環境に格納している設定ファイル等のファイルを移行先環境にコピーするため、設定を移行するファイルを移行先マシンで利用できる場所にコピーしてください

対象のファイルは以下になります。

表3.1 ファイルコピーによるバックアップ対象のファイル

ファイル名	対象OS	サイト区分	移行元のファイルパス
デーモン設定	Windows	ローカルサイト	%InstallDirectory%\etc\daemon.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>\etc\daemon.conf
	UNIX	共通	/usr/lib/nqs/rc/daemon.conf
		ローカルサイト	/usr/spool/nqs/daemon.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>/nqs/daemon.conf

ファイル名	対象OS	サイト区分	移行元のファイルパス
イベント設定	UNIX	ローカルサイト	/usr/spool/nqs/gui/jnwcaster.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>/nqs/gui/jnwcaster.conf
イベント定義	Windows	ローカルサイト	%InstallDirectory%\spool\conf\JNWEXEjobmsg.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>\spool\conf\JNWEXEjobmsg.conf
	UNIX	ローカルサイト	/usr/spool/nqs/gui/jobmsg.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>/nqs/gui/jobmsg.conf
エラーログファイルの設定	UNIX	ローカルサイト	/usr/spool/nqs/gui/log.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>/nqs/gui/log.conf
WOBS連携設定（SVのみ）	Windows	ローカルサイト	%InstallDirectory%\etc\wobsconf.f
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>\etc\wobsconf.f
	UNIX	ローカルサイト	/usr/spool/nqs/gui/wobsconf.f
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>/nqs/gui/wobsconf.f
jcdbs設定	Windows	ローカルサイト	%InstallDirectory%\etc\jcdbs.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>\etc\jcdbs.conf
	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	/usr/local/netshep/lib/nqs/rc/jcdbs.conf
jnwschprtコンフィグレーション	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\spool\conf\JNWSCHPRT.F
		各ユーザデータディレクトリ配下に作成している場合	%InstallDirectory%\spool\users\<ユーザ名>\JNWSCHPRT.F
	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	/usr/lib/nqs/gui/bin/jnwschprt.f
		各ユーザデータディレクトリ配下に作成している場合	/usr/spool/nqs/gui/<ユーザ名>/jnwschprt.f
SAP接続先設定	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\etc\destconf.f

ファイル名	対象OS	サイト区分	移行元のファイルパス
	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	/usr/lib/nqs/sap/destconf.f
jcres設定	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\etc\jcres.conf
	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	/usr/lib/nqs/rc/jcres.conf
文字コード変換の設定	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	/usr/lib/nqs/codecnv.cnf
.nsifrc	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	<各ユーザのホームディレクトリ>/.nsifrc
名前解決設定	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\etc\resolv.def
	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	/usr/lib/nqs/rc/resolv.def
サイトリスト	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\etc\site.list
サイト設定	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\etc\site.conf
ジョブ実行環境設定（MG/SV両方）[注1]	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\spool\users\<ユーザ名>\jobexe.conf
サーバ環境のマッピング情報	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	%InstallDirectory%\etc\HOSTS.NQS
jcwebserver設定	Windows	ローカルサイト	%InstallDirectory%\etc\jcwebserver.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>\etc\jcwebserver.conf
	UNIX	共通	/usr/lib/nqs/rc/jcwebserver.conf
		ローカルサイト	/usr/spool/nqs/jcwebserver.conf
		クラスタサイト	<JobCenterサイトデータベースのパス>/nqs/jcwebserver.conf
起動スクリプト	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	/usr/local/netshep/lib/nqs/rc/配下のshファイル

[注1] SVに設定している場合SVからバックアップしてください。

移行先にファイルを配置する際、移行元の所有者やパーミッションの整合性を合わせる必要があります。所有者やパーミッションを維持できるようにするか、配置時に整合性を合わせられるようにファイル採取時に記録してください。

3.2.2. 定義情報のダウンロード

JobCenterから移行用の定義情報データをダウンロードする方法について記述します。

3.2.2.1. 定義情報の種類

移行元マシンでダウンロード可能な定義情報には以下の種類があります。

古いバージョンで作成された定義情報やバージョンアップ後に使用できなくなった値（例：ジョブネットワーク名の半角カタカナ）が含まれる場合にはエラーが発生する場合があります。

■ジョブネットワーク

■スケジュール

■起動トリガ

■カレンダ

■カスタムジョブ

■カスタムジョブ定義アイコン

3.2.2.2. 定義情報のダウンロード方法

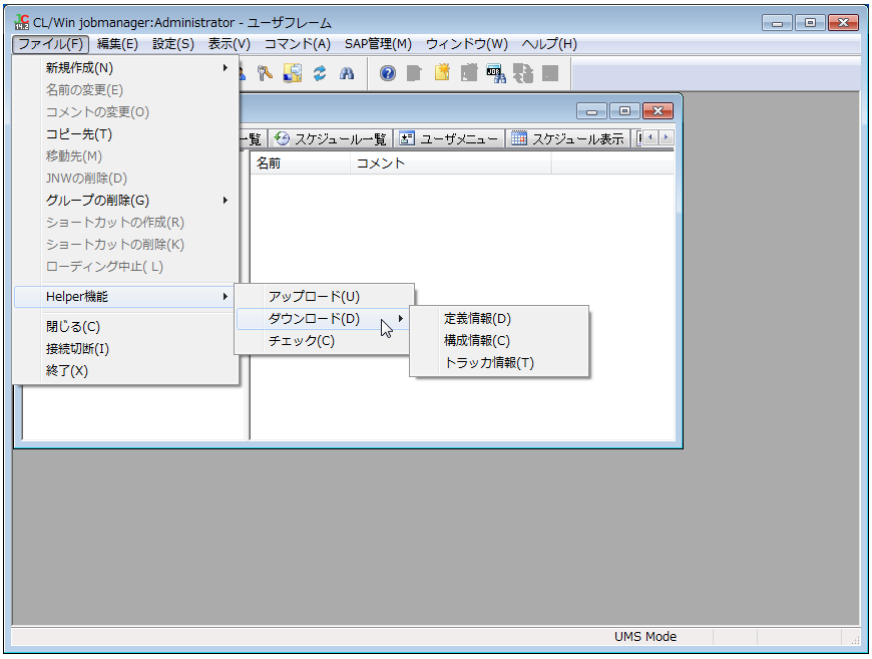
定義情報をダウンロードする方法には以下の2種類があります。

■CL/Winの「Helper機能」からダウンロード

■jdh_downloadコマンドによるダウンロード

3.2.2.2.1. CL/Winの「Helper機能」からダウンロード

本手順では、CL/Winの「Helper機能」を使用して定義情報のダウンロードを行います。CL/Winの「Helper機能」から「ダウンロード」→「定義情報」から、対象となる条件を選択してダウンロードを行います。



以下の条件を指定してダウンロードを行います。

■ダウンロード対象ユーザの選択

- 全ユーザ（JobCenter管理者のみ）

■ダウンロード対象情報の選択

- 移行元、移行先のマシンが異なる場合

  全ての定義を移行する必要があるため、以下の全ての定義が対象になります。

  - ジョブネットワーク
  - スケジュール
  - 起動トリガ
  - カレンダ
  - カスタムジョブ
  - カスタムジョブ定義アイコン

- 移行元、移行先のマシンが同じ場合

  ジョブネットワークの一部パラメータの修正を目的とするため、ジョブネットワークのみが対象になります。

  - ジョブネットワーク

それぞれグループや個別のオブジェクトを指定してダウンロードすることもできます。

3.2.2.2.2. jdh_downloadコマンドによるダウンロード

本手順では、jdh_downloadコマンドを使用して定義情報をダウンロードします。

jdh_downloadコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.13 jdh_download 定義情報のダウンロード」を参照してください。

■移行元、移行先のマシンが異なる場合のコマンド例

以下のとおり全ての定義を対象にオプションを指定してください。

- UNIXの場合

```
/usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_download -a -t jscdl -r jscf
```

- Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jdh_download -a -t jscdl -r jscf
```

■移行元、移行先のマシンが同じ場合のコマンド例

以下のとおりジョブネットワーク定義を対象にオプションを指定してください。

- UNIXの場合

```
/usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_download -a -t j -r j
```

- Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jdh_download -a -t j -r j
```

3.3. 移行先作業

ここでは移行先環境で必要な作業について記述します。

■移行元、移行先のマシンが異なる場合

- 構成情報

  引き継ぎができないデータおよび引き継ぎができるデータについて作業を行います。詳細は「3.3.2.1 引き継ぎができないデータ」および「3.3.2.2 引き継ぎができるデータ」を参照してください。

- 定義情報

  詳細は「3.3.3 定義情報の移行 」を参照してください。

■移行元、移行先のマシンが同じ場合

- 構成情報

  引継ぎができないデータについて作業を行います。詳細は「3.3.2.1 引き継ぎができないデータ」を参照してください。

- 定義情報

  詳細は「3.3.3 定義情報の移行 」を参照してください。

3.3.1. JobCenterの構築

3.3.1.1. 移行元、移行先のマシンが異なる場合

移行先のマシンに新規にJobCenterをインストールします。

インストール（UNIXの場合はセットアップ）時、スタンダードモードを選択してください。

UNIXの場合はセットアップ時、移行元と同じ言語環境を選択してください。移行元の設定はReport　Helperからも確認できます。構成情報の取得で作成した移行元MGの構成情報を含むJPFファイルからReport　Helperを使用して「言語環境」の帳票を作成し、確認してください。

セットアップの詳細は<セットアップガイド>の3章 「JobCenter MGをインストールする」 を参照してください。

Report Helperを利用した帳票の作成方法については、<Helper機能利用の手引き>の「3.4.2 JPFファイルを印刷帳票ツールに読み込む」および<Helper機能利用の手引き>の「3.4.3　帳票シートを作成する」を参照してください。

ローカル環境でNATS_URLの接続先のポート番号を変更したい場合やクラスタ環境全般では、クラスタサイト、ローカルサイトそれぞれの daemon.conf にNATS_URLの設定を追加する必要があります。

詳細は、UNIX版の場合は<スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>の「2.3.3.1.3　サイトの設定（運用系・待機系）」 の「■NATSサーバへの接続先URLの設定」、Windows版の場合は<スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>の「2.3.3.2.3　サイトの設定（運用系・待機系）」　の「■NATSサーバへの接続先URLの設定」参照してください。

3.3.1.2. 移行元、移行先のマシンが同じ場合

JobCenterをスタンダードモードでバージョンアップまたはインストールします。

■インストールの場合

インストール（UNIXの場合はセットアップ）時、スタンダードモードを選択してください。

指定するディレクトリは、移行元と同じディレクトリを指定してください。

UNIXの場合はセットアップ時、移行元と同じ言語環境を選択してください。移行元の設定はReport　Helperからも確認できます。構成情報の取得で作成した移行元MGの構成情報を含むJPFファイルからReport Helperを使用して「言語環境」の帳票を作成し、確認してください。

セットアップの詳細は<セットアップガイド>の3章 「JobCenter MGをインストールする」 を参照してください。

Report Helperを利用した帳票の作成方法については、<Helper機能利用の手引き>の「3.4.2 JPFファイルを印刷帳票ツールに読み込む」および<Helper機能利用の手引き>の「3.4.3　帳票シートを作成する」を参照してください。

ローカル環境でNATS_URLの接続先のポート番号を変更したい場合やクラスタ環境全般では、クラスタサイト、ローカルサイトそれぞれの daemon.conf にNATS_URLの設定を追加する必要があります。

詳細は、UNIX版の場合は<スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>の「2.3.3.1.3　サイトの設定（運用系・待機系）」 の「■NATSサーバへの接続先URLの設定」、Windows版の場合は<スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>の「2.3.3.2.3 サイトの設定（運用系・待機系）」 の「■NATSサーバへの接続先URLの設定」参照してください。

■バージョンアップの場合

インストール（UNIXの場合はセットアップ）時、スタンダードモードを選択してください。

指定するディレクトリは、移行元と同じディレクトリを指定してください。

UNIXの場合はセットアップ時、移行元と同じ言語環境を選択してください。移行元の設定はReport　Helperからも確認できます。構成情報の取得で作成した移行元MGの構成情報を含むJPFファイルからReport Helperを使用して「言語環境」の帳票を作成し、確認してください。

セットアップの詳細は<セットアップガイド>の3章 「JobCenter MGをインストールする」 を参照してください。

Report Helperを利用した帳票の作成方法については、<Helper機能利用の手引き>の「3.4.2 JPFファイルを印刷帳票ツールに読み込む」および<Helper機能利用の手引き>の「3.4.3　帳票シートを作成する」を参照してください。

ローカル環境でNATS_URLの接続先のURLやポート番号を変更したい場合やクラスタ環境全般では、クラスタサイト、ローカルサイトそれぞれの daemon.conf にNATS_URLの設定を追加する必要があります。

詳細はUNIX版の場合は<スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>の「2.3.3.1.3 サイトの設定（運用系・待機系）」 の「■NATSサーバへの接続先URLの設定」、Windows版の場合は<スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>の「2.3.3.2.3 サイトの設定（運用系・待機系）」 の「■NATSサーバへの接続先URLの設定」参照してください。

3.3.2. 構成情報の移行

3.3.2.1. 引き継ぎができないデータ

3.3.2.1.1. マシン一覧

マシン一覧の移行方法について説明します。

はじめに、移行元のマシン一覧で登録していたマシンを特定するために移行元のMGで取得した構成情報を使用してReport Helperにて「マシン一覧」の帳票を作成します。

構成情報の取得で作成した移行元MGの構成情報を含むJPFファイルからReport　Helperを使用して「マシン一覧」の帳票を作成し、確認してください。Report　Helperでの帳票の作成方法については、<Helper機能利用の手引き>の「3.4.2　JPFファイルを印刷帳票ツールに読み込む」および<Helper機能利用の手引き>の「3.4.3　帳票シートを作成する」を参照してください。

移行元のMGのマシン一覧には、以下の3種類の項目が登録されている可能性があり、それぞれの項目において必要な移行作業が異なります。

■自分自身のMG

移行元でJobCenter　MGのインストール、セットアップ時に登録されています。移行先でJobCenter　MGのインストール、セットアップを行うことでマシン一覧に自動登録されるため、移行作業はありません。

■連携対象のMG

移行元でMG間連携を行っている場合に登録されています。必要に応じて移行先MGでもCL/Winでマシン一覧への登録を行います。

■連携対象のSV

移行元MGマシン以外のリモートサーバでジョブ実行を行っている場合に登録されています。移行先のSVに相当するAGは、マシン一覧ではなく、エージェント一覧への登録を行います。CL/Winまたはコマンドを利用して移行先MGのエージェント一覧にAGの登録を行い、AGのインストール、セットアップを行って移行先MGとの連携設定を実施します。

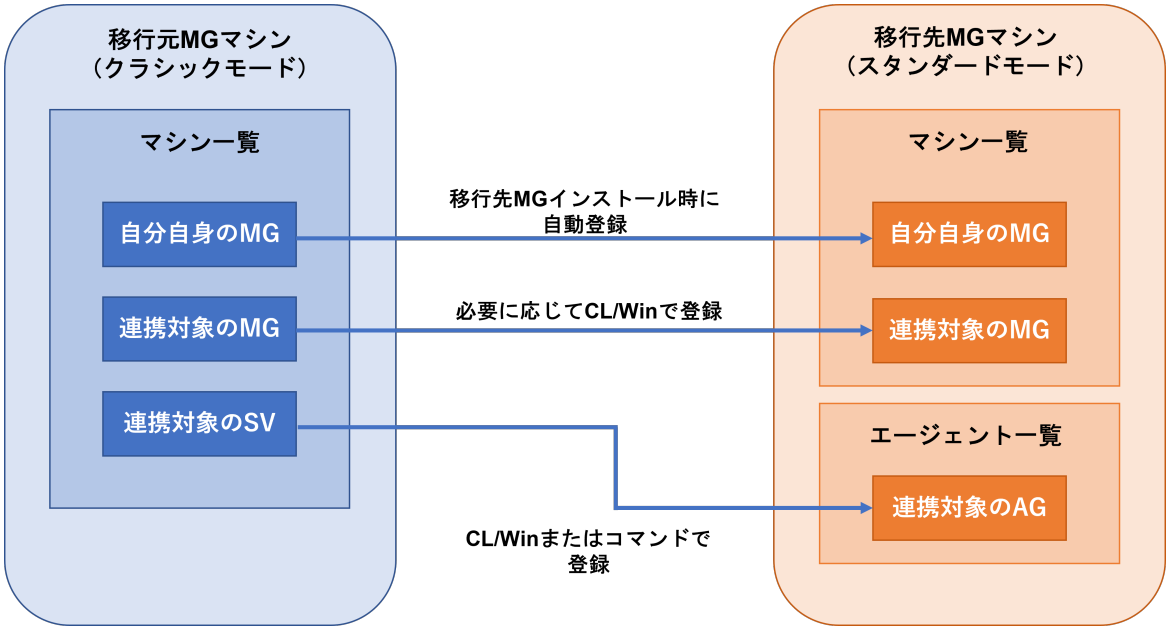


図3.3 マシン一覧の移行作業の概要

マシン一覧の移行作業の説明は、以下の流れで行います。手順1では連携対象のMGについて、手順2および3では連携対象のSVについて移行作業を行います。

1. 連携するMGをマシン一覧へ登録

2. 新規に連携するエージェントをMGのエージェント一覧へ登録

3. エージェントの構築

移行元のJobCenter　SV　環境は、クラシックモードまたは下位バージョンのMGとの連携に用いない場合、AGへの移行検証後にアンインストールすることを推奨します。

JobCenter SVのアンインストールの詳細は<セットアップガイド>の8章 「アンインストール」 を参照してください。

3.3.2.1.1.1. 連携するMGをマシン一覧へ登録

連携対象のMGについて、移行先MGでも連携を行う場合、マシン一覧への登録を行ってください。MGのマシン一覧への登録方法は<スタンダードモード用基本操作ガイド>の「10.1.1 マシン一覧へマシンを追加する」を参照してください。

3.3.2.1.1.2. 新規に連携するエージェントをMGのエージェント一覧へ登録

連携対象のSVについて、移行先のMGでエージェント一覧への登録を行います。

エージェント一覧への登録方法はCL/Winでエージェント一覧へ登録する方法hまたはjcexectrlコマンドでエージェント一覧へ登録する方法はの2通りあります。

移行元で多くのSVの登録を行っており、移行先でも多くのエージェントを登録する必要がある場合はjcexectrlコマンドを使用して一括で複数のエージェントを登録することが可能です。

3.3.2.1.1.2.1. CL/Winによるエージェント一覧への登録

本手順ではCL/Winを使用して、エージェント一覧への登録を行います。手順については<セットアップガイド>の6章 「JobCenter AGをインストールする」 を参照してください。

3.3.2.1.1.2.2. jcexectrlコマンドによるエージェント一覧への登録

本手順ではjcexectrlコマンドを利用してエージェント一覧への登録を行います。

作成するエージェントのパラメータを記載したエージェント定義作成用ファイルを作成し、移行先MG上でそのファイルを指定してjcexectrlコマンドを実行することでエージェント一覧への登録ができます。jcexectrlコマンドの詳細については<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.33 jcexectrl スタンダードモードのリソース参照・操作」を参照してください。

本手順は下図に示す2つの連携対象のSVをAGとして作成、登録する前提で説明を行います。

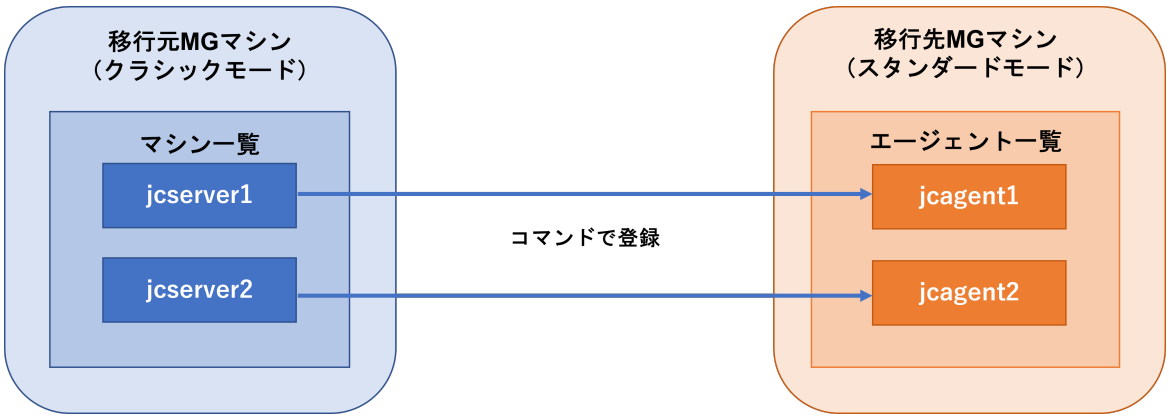


図3.4 連携対象SVの移行作業の例

本手順において使用するファイルの例を記述します。

ファイル	ファイル名
エージェント定義作成用ファイル	jcagent1_def.json、jcagent2_def.json

はじめに、以下のようなエージェントの定義作成用ファイルを登録するエージェントごとに作成します。

■jcagent1_def.json

```
{
        "name" : "jcagent1",
        "generate_key_pair": true,
        "max_concurrency": 1;
}
```

■jcagent2_def.json

```
{
        "name" : "jcagent2",
        "generate_key_pair": true,
        "max_concurrency": 1;
}
```

それぞれの設定値の詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.33　jcexectrl　スタンダードモードのリソース参照・操作」を参照してください。

ここで設定するエージェント名（例：jcagent1、jcagent2）が移行先環境でのエージェント一覧への表示名およびキューの転送設定での識別子として用いられます。

移行元SVのホスト名、サイト名などをエージェント名として利用することで、後述する定義情報の修正作業での設定が確認しやすくなります。

次に、作成したエージェントの定義作成用ファイルを入力とし、jcexectrlコマンドを使用してエージェント一覧への登録を行います。

登録を行うそれぞれのエージェントに対して、以下のようにjcexectrlコマンドを実行します。

jcexectrlコマンドが実行されると、エージェントの構築に必要な秘密鍵が生成されるので、記録、保存してください。

■UNIXの場合

```
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl agent create -f jcagent1_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl agent create -f jcagent2_def.json
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl agent create -f jcagent1_def.json
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl agent create -f jcagent2_def.json
```

一括で複数のエージェント登録を行う場合は、以下のようなスクリプトファイルを作成し、実行することで一括登録ができます。

■UNIXの場合

（例）agentcreate.sh

```
#!/bin/sh
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl agent create -f jcagent1_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl agent create -f jcagent2_def.json
```

■Windowsの場合

（例）agentcreate.bat

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl agent create -f jcagent1_def.json
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl agent create -f jcagent2_def.json
```

3.3.2.1.1.3. エージェントの構築

マシン一覧に登録したエージェントを構築します。エージェントを構築する各マシンにログインし、JobCenter AGのインストール、構築を行ってください。エージェントのインストール、構築手順については<セットアップガイド>の6章 「JobCenter AGをインストールする」 を参照してください。

3.3.2.1.2. キュー設定

キュー設定の移行方法について説明します。

キュー設定について、クラシックモードとスタンダードモードではキューの種類とキューの設定を保持するコンポーネントが異なります。

キューの種類は以下のようなモード間の違いがあります。

■クラシックモード

クラシックモードではバッチキュー、パイプキューの2種類のキューが存在します。

- バッチキュー

  バッチリクエストを投入・実行するためのキュー

- パイプキュー

  ほかのキューにリクエストを転送するためのキュー

■スタンダードモード

スタンダードモードではエージェントキュー、グループキューの2種類のキューが存在します。

- エージェントキュー

  バッチリクエストを投入・実行するためのキュー

- グループキュー

  エージェントキューにリクエストを転送するためのキュー

キューの設定を保持するコンポーネントについては以下のようなモード間の違いがあります。

■クラシックモード

キューの構成によりMG、MGと連携しているMGやSVにパイプキュー、バッチキューの設定が存在します。

■スタンダードモード

MGのみにグループキュー、エージェントキューの設定が存在します。ただし、エージェントキューを使用する場合は、事前にエージェントを構築する必要があります。

上記のモード間の違いを踏まえて、クラシックモードにおけるキューの構成から、スタンダードモードにおけるキューの構成を検討する必要があります。

キューの構成パターンは多岐にわたります。もっとも基本的な移行元でのキュー構成の例を2つ示し、それぞれでどのようにして移行先のキュー構成を検討すればよいかを説明します。

■パターン1 SVのバッチキューをMGから直接指定しているケースの移行

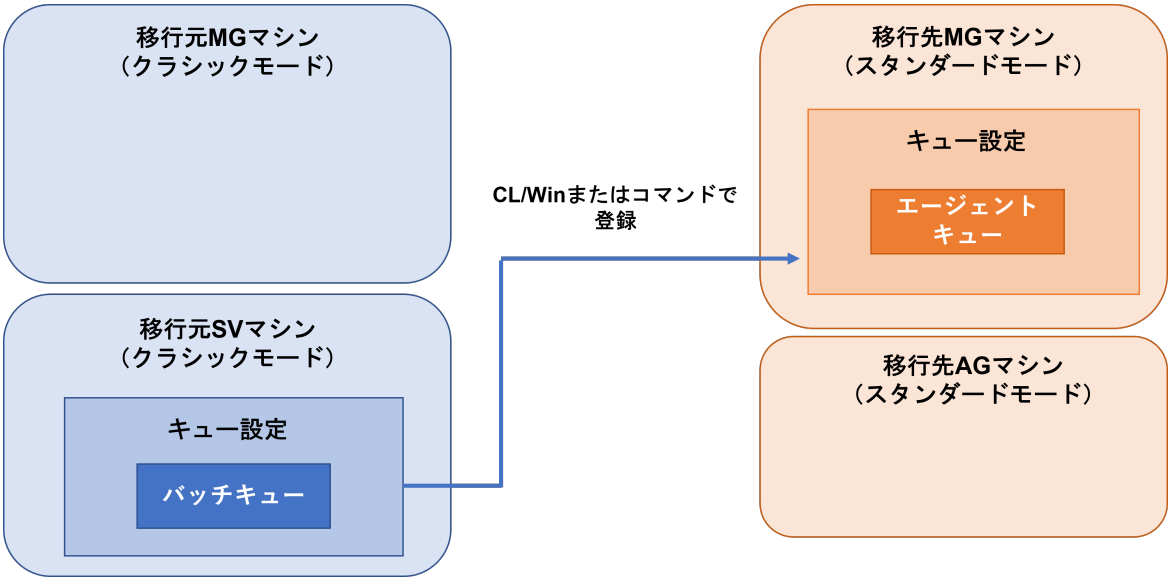


図3.5 移行元SVバッチキューのみの移行作業の例

このパターンは、ジョブネットワークや単位ジョブの投入キューにSVのバッチキューを直接指定しているパターンです。移行元環境の「SVのバッチキューをMGから直接指定してジョブリクエストを投入」といった構成を、移行先環境で「MGのエージェントキューをMGから直接指定してジョブリクエストを投入」といった構成になるように移行します。

バッチキューの設定は移行元SVに存在します。そのため、移行元SVの構成情報をもとにバッチキューの設定を確認し、移行先MGにエージェントキューを作成し、設定を行います。

■パターン2 MGのパイプキューからSVのバッチキューへ転送しているケースの移行

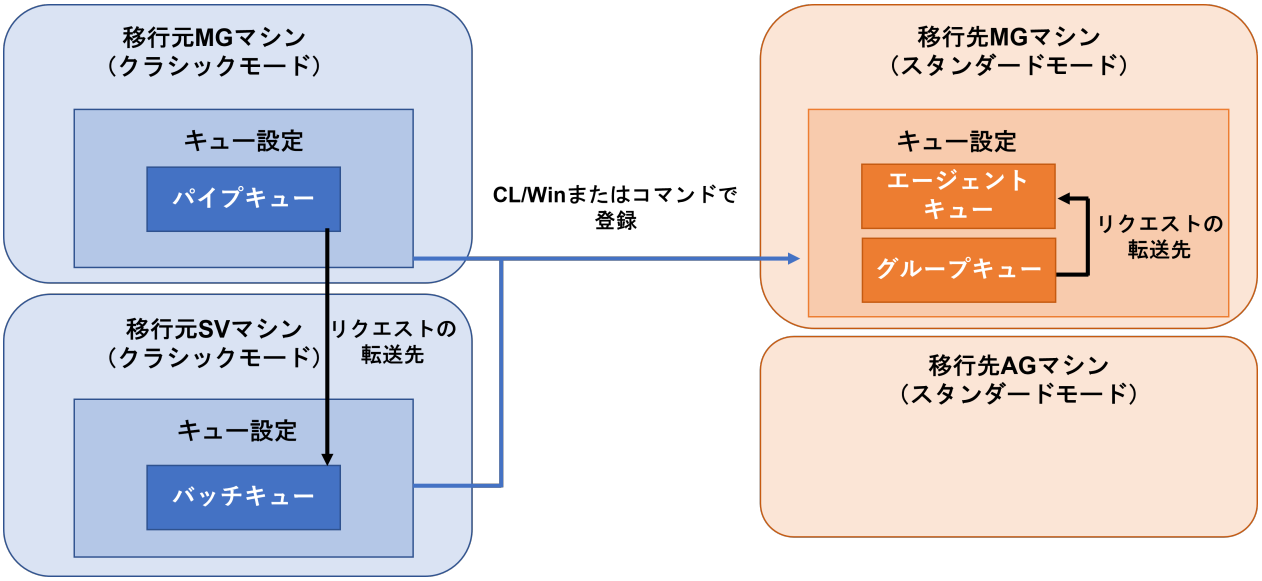


図3.6 移行元MGパイプキューと移行元SVバッチキューの移行作業の例

このパターンは、ジョブネットワークや単位ジョブの投入キューにMGのパイプキューを指定し、パイプキューからSVのバッチキューへリクエストを転送しているパターンです。移行元環境の「ジョブリクエストをMGのパイプキューからSVのバッチキューへ転送して投入」といった構成を、移行先環境で「ジョブリクエストをMGのグループキューからMGのエージェントキューへ転送して投入」といった構成になるように移行します。

パイプキューの設定は移行元MG、バッチキューの設定は移行元SVに存在し、パイプキューからバッチキューへリクエストを転送するような設定がパイプキューに含まれます。そのため、移行元MG、SVの構成情報をもとにパイプキュー、バッチキューの設定を確認し、移行先MGにグループキュー、エージェントキューを作成し、設定を行います。

また、作成したエージェントキューに対してグループキューからリクエストが転送されるようにグループキューに転送先の設定を行います。

本節では、パターン2の「MGのバイプキューからSVのバッチキューへ転送しているケースの移行」を例に挙げて説明します。

はじめに、移行元のキュー設定を確認します。本例では、移行元MGではパイプキューを設定しているため、移行元のMGで取得した構成情報を使用してReport Helperにて「キュー設定」の帳票を作成します。

構成情報の取得で作成した移行元のMGおよびSVの構成情報を含むJPFファイルからReport　Helperを使用して「キュー設定」の帳票を作成し、確認してください。Report Helperでの帳票の作成方法については、<Helper機能利用の手引き>の「3.4.2 JPFファイルを印刷帳票ツールに読み込む」および<Helper機能利用の手引き>の「3.4.3 帳票シートを作成する」を参照してください。

移行元MGのパイプキューのキュー設定をReport　Helperで出力した帳票から確認し、移行先MGにどのようなキューを作成するか、パラメータを設定するか検討します。本手順の例では移行元SVにバッチキューが存在するため、必要に応じてMGのパイプキュー同様にキューの設定の確認およびキューの作成、パラメータを検討してください。

クラシックモードにおけるパイプキュー、バッチキューで設定されている値については<クラシックモード用NQS機能利用の手引き>の「2.2 キュー」を参照してください。

スタンダードモードにおけるグループキュー、エージェントキューで設定できる値については<スタンダードモード用環境構築ガイド>の5章 「キュー・リクエスト管理」 を参照してください。

本手順では、エージェントキュー、グループキューを作成し、グループキューの転送先がエージェントキューとなるように設定します。移行先MGで作成するキューを検討した後、移行先MGでキューを作成します。
キューの作成方法はCL/Winでキューを作成する方法、またはjcexectrlコマンドでキューを作成する方法の2通りあります。

■移行元で多くのキューを作成しており、移行先でも多くのキューを作成する必要がある場合はjcexectrlコマンドを使用して、一括で複数のキューを作成することが可能です。

■エージェントキューの作成には、エージェントが構築されている必要があります。構築されていない場合は、<セットアップガイド>の6章 「JobCenter AGをインストールする」 を参照して、構築を行ってください。

3.3.2.1.2.1. CL/Winによるキューの作成

本手順ではCL/Winを使用して、キューを作成します。手順については<スタンダードモード用環境構築ガイド>の5章 「キュー・リクエスト管理」 を参照してください。

3.3.2.1.2.2. jcexectrlコマンドによるキューの作成

本手順ではjcexectrlコマンドを利用してキューを作成します。

作成するキューのパラメータを記載したキュー定義作成用ファイルを作成し、移行先MG上でそのファイルを指定してjcexectrlコマンドを実行することでキューの作成ができます。jcexectrlコマンドの詳細については<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.33 jcexectrl スタンダードモードのリソース参照・操作」を参照してください。

本手順は下図に示すエージェントキュー（jcagent_queue）、グループキュー（jcgroup_queue）を作成する前提で説明を行います。

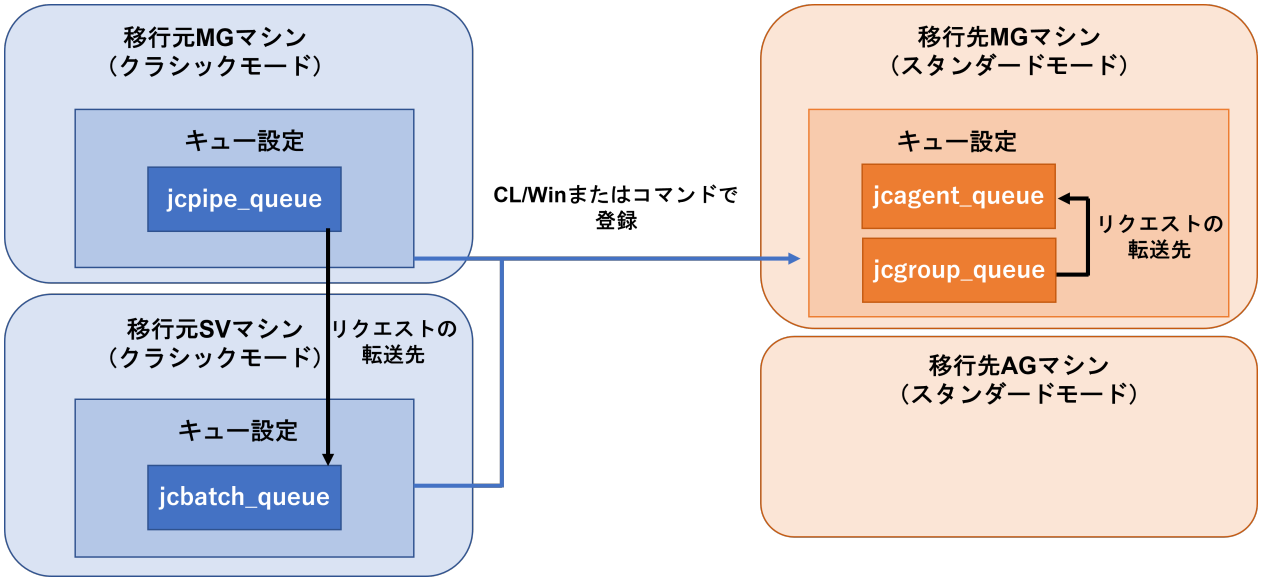


図3.7 キュー設定の移行作業の例

本手順において使用するファイルの例を記述します。

ファイル	ファイル名
キュー定義作成用ファイル	jcagent_queue_def.json、jcgroup_queue_def.json

本手順におけるエージェントに関連するパラメータの例を記述します。

エージェントに関連するパラメータ	値
エージェントID	778a50f1-b5e4-4714-9e1d-25ae9db14e62

エージェントIDはjcexectrlコマンドで確認することができます。詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.33.6.14 agent list」を参照してください。

はじめに、以下のようなエージェントキュー定義作成用ファイルを作成します。

■jcagent_queue_def.json

```
{
        "name": "jcagent_queue",
        "type": "agent",
        "can_enqueue": true,
        "can_dequeue": true,
        "max_concurrency": 1,
        "reboot_mode": "RESTART",
        "priority": 31,
        "agent": {
            "id": "778a50f1-b5e4-4714-9e1d-25ae9db14e62"
        }
}
```

設定値の詳細は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の5章 「キュー・リクエスト管理」 を参照して、どのような値を設定するかを検討してください。

次に、作成したエージェントキューの定義作成用ファイルを入力とし、jcexectrlコマンドを使用してエージェントキューを作成します。

以下のようにjcexectrlコマンドを実行します。

■UNIXの場合

```
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl queue create -f jcagent_queue_def.json
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl queue create -f jcagent_queue_def.json
```

出力結果として作成したエージェントキューの情報が出力されます。エージェントキューのキューIDはグループキューの定義作成用ファイルにてグループキューの転送先の情報として使用するため、記録しておいてください。

また、キューIDはjcexectrlコマンドでも確認することができます。詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.33.6.4 queue list」を参照してください。

本手順では以下のようなエージェントキューのキューIDが出力されたとして説明します。

エージェントキューに関連するパラメータ	**値**
エージェントキューのキューID	bbeafd8a-ba3c-43e2-b271-475c95aa4389

次に、以下のようなエージェントキューが転送先となるグループキュー定義作成用ファイルを作成します。

■jcgroup_queue_def.json

```
{
        "name": "jcgroup_queue",
        "type": "group",
        "can_enqueue": true,
        "can_dequeue": true,
        "reboot_mode": "RESTART",
        "members": [
            {
                "id": "bbeafd8a-ba3c-43e2-b271-475c95aa4389"
            }
        ]
}
```

設定値の詳細は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の5章 「キュー・リクエスト管理」 を参照して、どのような値を設定するかを検討してください。

次に、作成したグループキューの定義作成用ファイルを入力とし、jcexectrlコマンドを使用してグループキューを作成します。

以下のようにjcexectrlコマンドを実行します。

■UNIXの場合

```
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl queue create -f jcgroup_queue_def.json
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl queue create -f jcgroup_queue_def.json
```

一括で複数のキューを作成する場合は、以下のようなスクリプトを作成、実行することで一括作成ができます。

■エージェントキューの一括作成例

- UNIXの場合

（例）agentqueuecreate.sh

```
#!/bin/sh
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl queue create -f
 jcagent_queue_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcexecutor/jcexectrl queue create -f
 jcagent_queue2_def.json
...
```

- Windowsの場合

（例）agentqueuecreate.bat

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl queue create -f jcagent_queue_def.json
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl queue create -f jcagent_queue2_def.json
...
```

3.3.2.1.3. ユーザマッピング

ユーザマッピングの移行方法について説明します。

ユーザマッピングとは、MGからSV(AG)にジョブを転送したときに、SV(AG)上のどのOSユーザの権限でジョブを実行するかを指定するパラメータです。このパラメータは、クラシックモードとスタンダードモードで、情報の設定先と情報の種類が異なります。

クラシックモードでは、SVマシン上に以下の3種のパラメータとして登録されています。

■ジョブ転送元のuid(ユーザID)

■ジョブ転送元のmid(マシンID)

■ジョブ転送先のuid(ユーザID)

一方、スタンダードモードでは、MGマシン上に以下の3種のパラメータとして登録されています。

■実行ユーザラベル

■ジョブ転送先のエージェントID

■ジョブ転送先のOSユーザ名

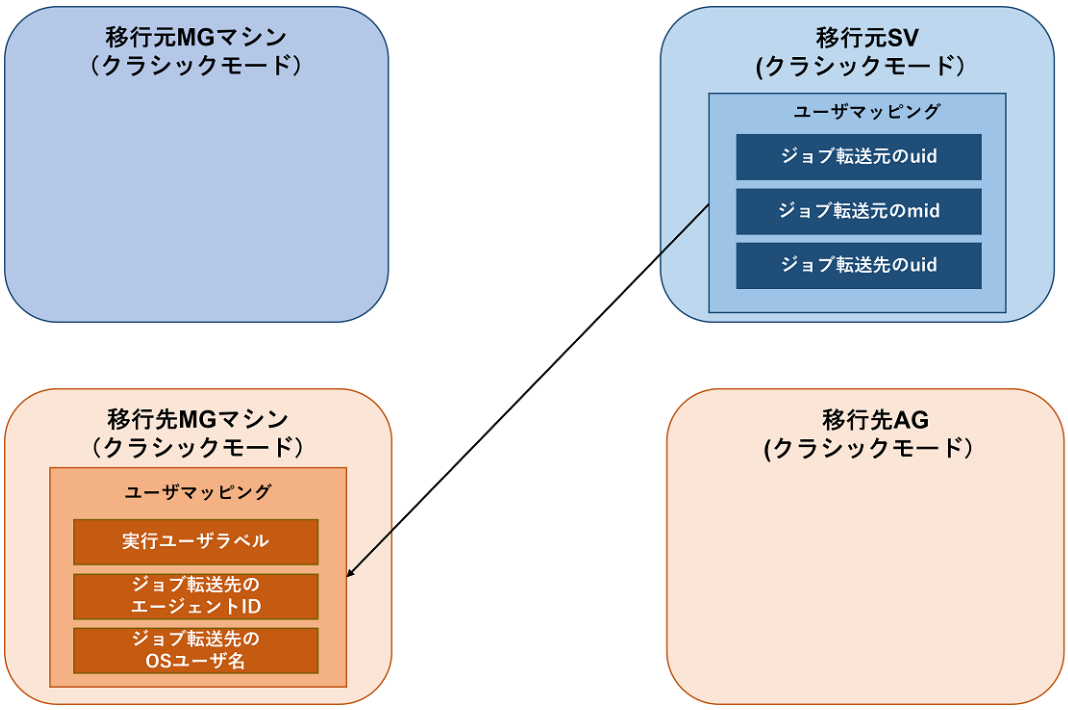


図3.8 ユーザマッピングの移行イメージ

クラシックモードにおけるユーザマッピングの詳細は<クラシックモード用環境構築ガイド>の「3.2　ユーザの関連付けを行う（ユーザマッピング）」を、スタンダードモードにおけるユーザマッピングの詳細は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.2 ユーザマッピング」を参照してください。

クラシックモードとスタンダードモードでは情報の設定先と情報の種類が異なるため、移行元のユーザマッピングの情報から移行先にどのようなパラメータでユーザマッピングの設定を行うのかを検討し、移行先のMGにユーザマッピングの情報を登録する必要があります。

本節では、図3.9 移行元環境におけるユーザマッピング設定例、図3.10 移行先環境におけるユーザマッピング設定例に示すような移行元環境のユーザマッピングの設定から移行先環境のユーザマッピングの設定を行うケースを例に、移行の流れを説明します。

移行元SV(クラシックモード)のジョブ転送元、ジョブ転送先のuidの項目における括弧内の文字列は、該当するuidに対応するユーザ名を表現しています。

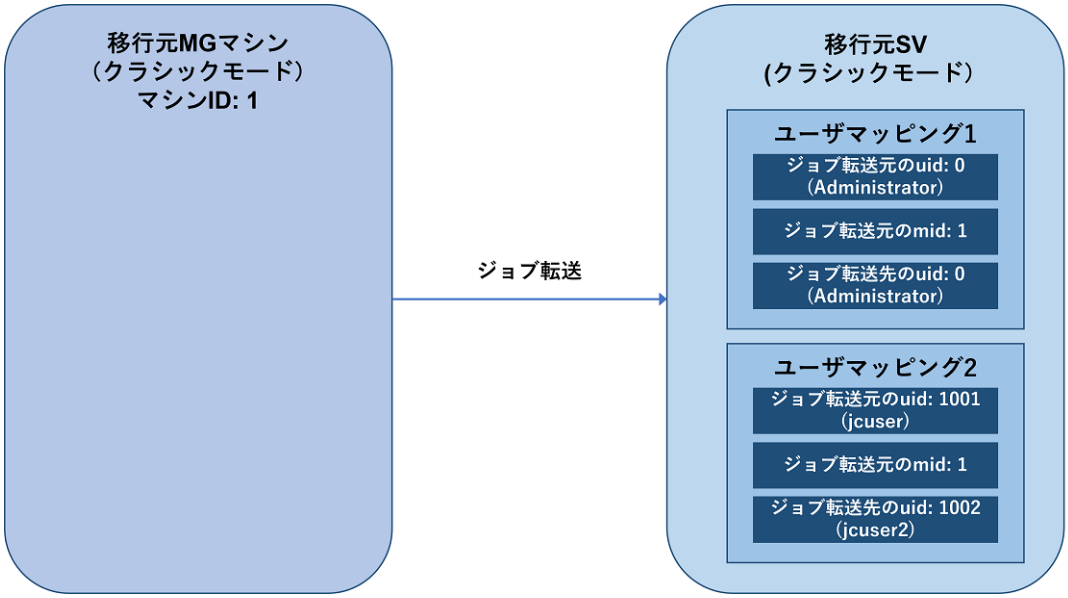


図3.9 移行元環境におけるユーザマッピング設定例

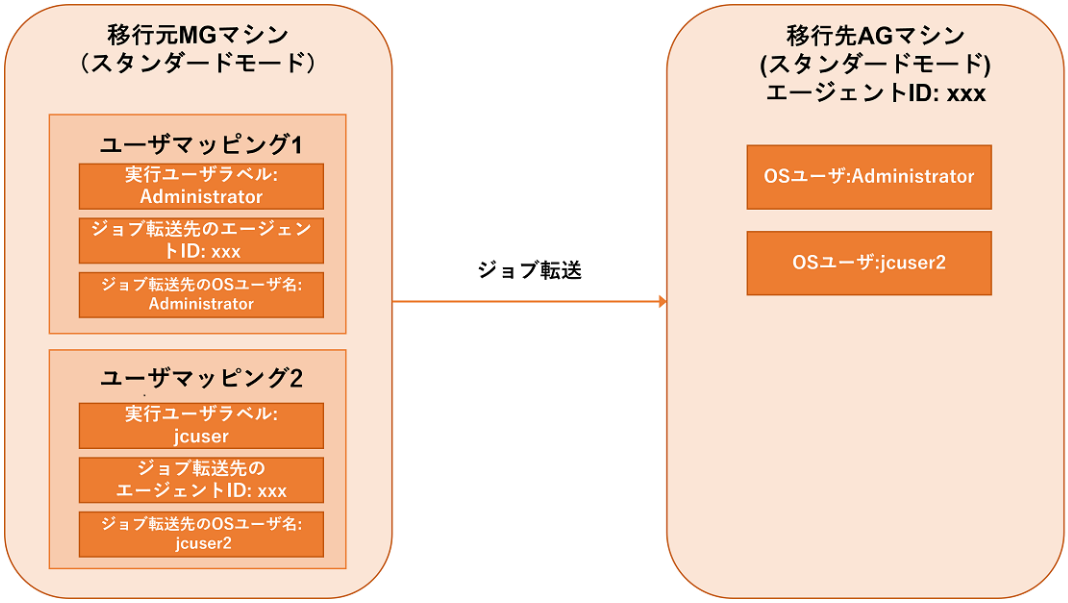


図3.10 移行先環境におけるユーザマッピング設定例

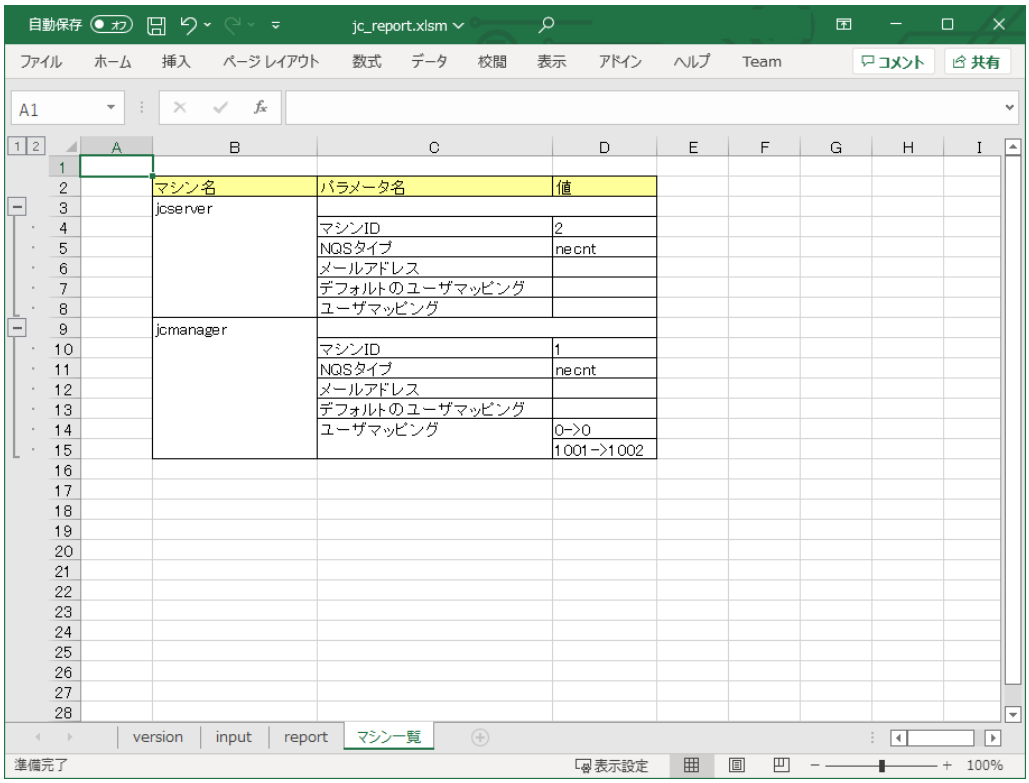
最初に、移行元環境でどのようなユーザマッピング設定になっているかを確認します。

移行元環境では、ユーザマッピングの設定は移行元SVに存在します。事前に取得しておいた移行元SVの構成情報を含むJPFファイルからReport　Helperを使用して「マシン一覧」および「ユーザー一覧」の帳票をそれぞれ作成してください。Report　Helperでの帳票の作成方法については、<Helper機能利用の手引き>の「3.4.2　JPFファイルを印刷帳票ツールに読み込む」および<Helper機能利用の手引き>の「3.4.3　帳票シートを作成する」を参照してください。

ユーザマッピングが登録されている「マシン一覧」シートを確認します。図3.11　マシン一覧帳票シートの例では、「マシンID」の欄が1の箇所にある「ユーザマッピング」行に登録されている2つのエントリが、移行元SVにおけるジョブ転送元のmid(マシンID)が1からのユーザマッピングの設定です。

このシートではOSユーザはuidとして表示されます。矢印の左側がジョブ転送元のuid、右側がジョブ転送先のuidです。図3.11　マシン一覧帳票シートの例では、「ユーザマッピング」行に、ジョブ転送元のuidが0、ジョ

ブ転送先のuidが0のユーザマッピングと、ジョブ転送元のuidが1001、ジョブ転送先のuidが1002のユーザマッピングの2つが登録されています。



マシン名	パラメータ名	値
jcserver		
	マシンID	2
	NQSタイプ	necnt
	メールアドレス	
	デフォルトのユーザマッピング	
	ユーザマッピング	
jcmanager		
	マシンID	1
	NQSタイプ	necnt
	メールアドレス	
	デフォルトのユーザマッピング	
	ユーザマッピング	0->0
		1001->1002

図3.11 マシン一覧帳票シート

スタンダードモードのユーザマッピングでは、ジョブ転送先のOSユーザはuidではなくユーザ名で登録を行う必要があります。そのため、ジョブ転送先のuidに対応するOSユーザ名を「ユーザ一覧」シートで確認します。

スタンダードモードでは、ジョブ転送元は実行ユーザラベルで登録します。実行ユーザラベルは任意の文字列として登録できるため、移行元環境のジョブ転送元のuidに対応するOSユーザ名を特定する必要はありません。ジョブ転送元のuidに紐づくOSユーザ名を特定したい場合は、移行元のMGで取得した構成情報を使用してReport Helperにて「ユーザ一覧」の帳票を作成して確認してください。この節の例では、簡易化のため、移行先の実行ユーザラベル名に移行元MGマシンのOSユーザ名を使用するものとして説明します。

図3.12　ユーザ一覧帳票シートの例では、ユーザID(uid)が0のOSユーザ名はAdministrator、1002のOSユーザ名がjcuser2であることが分かります。

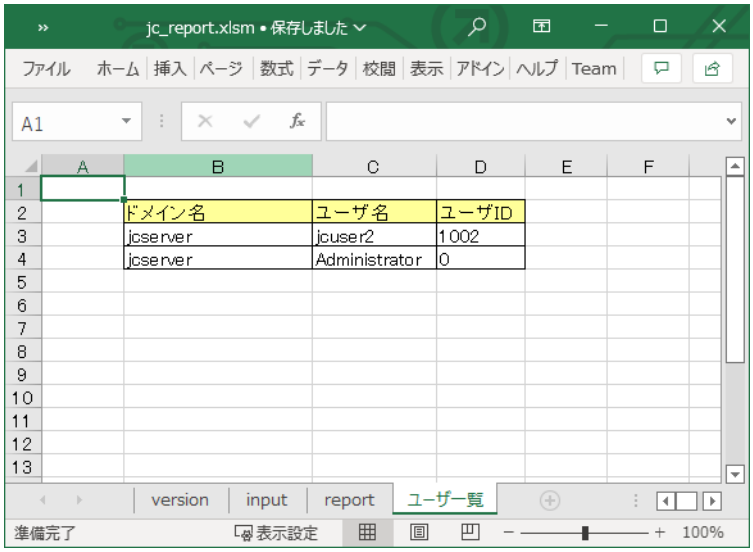


図3.12 ユーザー覧帳票シート

ここまでの作業で、移行元環境が前述のユーザマッピング設定例のような状況であることが確認できたことになります。移行元の設定が確認できたら、移行先にどのようなユーザマッピング設定を行うかを検討します。

移行先では、ユーザマッピング情報として実行ユーザラベル、ジョブ転送先のエージェントID、ジョブ転送先のOSユーザ名の3つの情報が必要です。それぞれの情報は以下のようにして決定します。

■実行ユーザラベル

移行先環境の設定例では移行元環境のジョブ転送元ユーザ名としていますが、任意の文字列を設定できます。一般的には、ジョブ転送先のOSユーザ名の役割に基づいて決定します。

たとえば、ジョブ転送先でデータベースへのアクセスを行う役割のOSユーザでジョブを実行する場合、「dbuser」といった文字列にします。

■ジョブ転送先のエージェントID

移行元のmid(マシンID)の情報をもとに、どのエージェントにジョブを転送するかによって決定します。移行元のユーザマッピングでは、マシンIDが1のマシン(移行元MGマシン)と移行元SVマシンの設定が行われていたため、移行先でも移行先MGマシンと移行先AGマシンの設定を行います。

そのため、この節の設定例では移行先AGマシンのエージェントIDを登録します。

■ジョブ転送先のOSユーザ名

移行元のジョブ転送先のuidに紐づくOSユーザ名を登録します。

この節の設定例では、Administratorとjcuser2をそれぞれ登録します。

このような流れにしたがって作業することで、移行先MGマシンに登録すべきユーザマッピング設定を決定します。

移行先MGマシンに登録するユーザマッピング設定が決定したら、移行先環境にてユーザマッピングの登録作業を行います。移行作業の説明は、以下の流れで行います。手順1は移行先のAGで、手順2は移行先のMGで移行作業を行います。

1. エージェントでOSユーザを登録

2. 移行先MGでOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録

OSユーザの登録およびユーザマッピングの追加には、エージェントが構築されている必要があります。構築されていない場合は、<セットアップガイド>の6章 「JobCenter AGをインストールする」を参照して、構築を行ってください。

3.3.2.1.3.1. エージェントでOSユーザを登録

エージェントでOSユーザを登録します。手順については、<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「2.7 OSユーザ登録」を参照してください。

3.3.2.1.3.2. 移行先MGでOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録

移行先MGでOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録を行います。

移行先MGでのOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録方法は以下の2通りあります。

■CL/WinによるOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録

■jcauthctrlコマンドによるOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録

移行元で多くのSVの登録を行っていたり、多くのユーザを利用している場合はjcauthctrlコマンドを使用して、一括で複数のOSユーザ情報およびユーザマッピングを登録することが可能です。

3.3.2.1.3.2.1. CL/WinによるOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録

本手順ではCL/Winを使用して、OSユーザ情報およびユーザマッピングの登録を行います。手順については、<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.2.1 OSユーザ情報の登録」および<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.2.4 ユーザマッピングの追加」を参照してください。

3.3.2.1.3.2.2. jcauthctrlコマンドによるOSユーザ情報およびユーザマッピングの登録

本手順では、jcauthctrlコマンドを使用して、ユーザ情報の登録およびユーザマッピングの登録を行います。

本手順において使用するファイルの例を記述します。

ファイル	ファイル名
OSユーザ情報登録用ファイル	osuser_def.json、osuser2_def.json
ユーザマッピング追加用ファイル	usermapping_def.json、usermapping2_def.json

本手順におけるエージェントに関連するパラメータの例を記述します。

エージェントに関連するパラメータ	値
エージェントID	4bd43862-ed58-4f22-bd19-95b8751d1847

本手順におけるユーザに関連するパラメータの例を記述します。

ユーザに関連するパラメータ	値
Administratorのパスワード	Ad!pass123
jcuserのパスワード	Jcu2!pass123

OSユーザ情報を登録する定義ファイルは、登録するユーザに対してそれぞれ以下のように作成します。

AGがUNIXの場合、以下のosuser_def.json、osuser2_def.jsonにおけるパラメータ「password」は不要です。

■osuser_def.json

```
{
```

```
      "user_name": "Administrator",
      "user_type": "os",
      "password":  "Ad!pass123"
}
```

■osuser2_def.json

```
{
      "user_name": "jcuser2",
      "user_type": "os",
      "password":  "jcu2!pass123"
}
```

ユーザマッピングを追加するための定義ファイルは、追加するユーザマッピングの組み合わせに対してそれぞれ以下のように作成します。

■usermap_def.json

```
{
      "exec_user_label":  "Administrator",
      "os_user": "Administrator"
}
```

■usermap2_def.json

```
{
      "exec_user_label":  "jcuser",
      "os_user": "jcuser2"
}
```

それぞれの設定値の詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.34 jcauthctrl ユーザ情報の管理」を参照してください。

後述するjcauthctrlコマンドには、エージェントIDの指定が必須となります。

以下のjcexectrlコマンドでエージェントIDを取得してください。

■UNIXの場合

```
/usr/lib/nqs/gui/bin/jcexecutor/jcexectrl agent list
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexectrl agent list
```

次に、作成したOSユーザ情報登録用ファイルを入力とし、jcauthctrlコマンドを使用してOSユーザ情報の登録を行います。作成したファイルそれぞれに対して、以下のようにjcauthctrlコマンドを実行します。

■UNIXの場合

```
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser2_def.json
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser_def.json
```

```
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser2_def.json
```

最後に、ユーザマッピングの追加用ファイルを入力とし、jcauthctrlコマンドを使用してユーザマッピングの追加を行います。作成したファイルそれぞれに対して、以下のようにjcauthctrlコマンドを実行します。

■UNIXの場合

```
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f usermapping_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f usermapping2_def.json
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f usermapping_def.json
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f usermapping2_def.json
```

一括でOSユーザ情報の登録およびユーザマッピングの追加を行う場合は、以下のようなスクリプトファイルを作成し、実行することで一括登録、追加ができます。

■UNIXの場合

（例）usermapping.sh

```
#!/bin/sh
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser2_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-
ed58-4f22-bd19-95b8751d1847 -f usermapping_def.json
/usr/local/netshep/lib/nqs/jcauth/jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-
ed58-4f22-bd19-95b8751d1847 -f usermapping2_def.json
```

■Windowsの場合

（例）usermapping.bat

```
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser_def.json
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-os-user --agent-id 4bd43862-ed58-4f22-
bd19-95b8751d1847 -f osuser2_def.json
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-
ed58-4f22-bd19-95b8751d1847 -f usermapping_def.json
%InstallDirectory%\bin\jcauth\jcauthctrl add-user-mapping --agent-id 4bd43862-
ed58-4f22-bd19-95b8751d1847 -f usermapping2_def.json
```

3.3.2.1.4. デフォルトパラメータ

CL/WinでMGに接続し、メニューバーの［設定］－［パラメータの設定］からデフォルトパラメータを移行元マシンと移行先マシンが同じ場合は修正し、移行元マシンと移行先マシンが異なる場合は新たに設定します。JobCenterに登録されている全てのユーザに対して修正または設定が必要です。

どちらの場合においても共通で必要となる作業として、移行元MGのデフォルトパラメータの設定をはじめに確認します。構成情報の取得で作成した移行元MGの構成情報を含むJPFファイルからReport Helperを使用

して「デフォルトパラメータ」の帳票を作成してください。Report Helperでの帳票の作成方法については、<Helper機能利用の手引き>の「3.4.2 JPFファイルを印刷帳票ツールに読み込む」および<Helper機能利用の手引き>の「3.4.3 帳票シートを作成する」を参照してください。

クラシックモードとスタンダードモードでは、以下のようにキューのパラメータのフォーマットが異なります。

■クラシックモード

- パイプキュー、バッチキュー

  <キュー名>@<マシン名>

■スタンダードモード

- エージェントキュー

  <キュー名>@<エージェント名>

- グループキュー

  <キュー名>@<マネージャ名>

そのため、デフォルトパラメータのキューのフォーマットをJobCenterの移行に合わせてクラシックモードからスタンダードモードに合わせたフォーマットにする必要があります。

キューのフォーマットが含まれる該当のパラメータは以下の通りです。

■ジョブネットワーク

デフォルト投入キュー

■単位ジョブ

投入キュー

■WOBSジョブ

投入キュー

移行元マシンと移行先マシンが同じ場合は、移行元の情報が残っているため、作成した帳票をもとに修正してください。

移行元マシンと移行先マシンが異なる場合は、作成した帳票をもとに新たに設定してください。

また、移行元マシンと移行先マシンが異なる場合は、ジョブネットワーク、単位ジョブ、WOBSジョブのキューパラメータ以外のデフォルトパラメータについて、作成した帳票をもとに移行元マシンと同じ値を新たに設定してください。

デフォルトパラメータの詳細は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「7.1　JobCenter部品のデフォルトパラメータの設定を定義する」を参照してください。

3.3.2.1.5. スタンダードモードの設定ファイルに置き換わるパラメータ

クラシックモードの設定パラメータのうち、スタンダードモードの設定ファイルに置き換わるパラメータがあります。以下の対応表を参考に設定を行ってください。

3.3.2.1.5.1. daemon.confのパラメータ

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
NQSDAEMON_OPT=-s	jcexecutor_manager.yaml	queue.onStartup.action
説明		
JobCenter MG起動時のキューの動作を設定します。 JobCenter MG起動時に全てのキューを停止する場合はstopを指定してください。停止前のキューの状態を保持する場合は規定の動作のため設定不要です。 jcexecutor_manager.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「6.8.2 jcexecutor_managerデーモンの設定ファイルの使用可能パラメータ」を参照してください。		

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
NQSDAEMON_OPT=-x idc_keepalive<間隔(秒)>	jcexecutor_agent.yaml	■websocket.timeout ■websocket.connectRetryInterval
説明		
JobCenter AGからJobCenter MGへの接続する際のリトライ間隔やKeepAliveの設定を行います。 規定の設定値から変更する場合は、お客様の環境に合わせて設定してください。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」、リトライ間隔やKeepAliveの設定については<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.2 マネージャへの接続のリトライ間隔を変更する」を参照してください。		

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
NQSDAEMON_OPT=-x trkappend=ON/OFF	jcexecutor_agent.yaml	request.restart.resultAppend
説明		
リクエスト再実行時に、標準出力および標準エラー出力を追記するかどうかを設定します。 上書きする場合はfalseを指定してください。追記する場合は規定の動作のため設定不要です。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」を参照してください。		

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
NQSDAEMON_PATH_EXPORT=1	jcexecutor_agent.yaml	request.environment.export.path
説明		
リクエスト実行時の環境変数PATHの扱いを設定します。 JobCenter MGの環境変数PATHを引き継ぐ場合はmanagerを指定してください。JobCenter AGの環境変数PATHを使用する場合は規定の動作のため設定不要です。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」を参照してください。		

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
NQSDAEMON_OPT=-c	jcexecutor_agent.yaml	request.clearUserToken
説明		
リクエスト実行時に使用するユーザトークン情報のキャッシュの動作を設定します。 キャッシュを利用せず、常にユーザトークンの取得を行う場合はalwaysを指定してください。キャッシュを利用する場合は規定の動作のため設定不要です。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」を参照してください。		

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
JNWENGINE_OPT=-F close_check=ON	jcexecutor_agent.yaml	filecheck.confirmClose
説明		
ファイル待ち合わせ部品で通過条件が「存在する」または「更新」の場合に、他プロセスにオープンされているかの確認有無を設定します。 他プロセスにオープンされているか確認し、されていなければ条件を満たす動作にする場合はtrueを指定してください。他プロセスにオープンされているか確認せずに、即座に条件を満たす動作にする場合は規定の動作のため設定不要です。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」を参照してください。 filecheck.confirmCloseパラメータは、ファイル待ち合わせ部品でJobCenter AG上のファイルを待ち合わせる際の設定になります。JobCenter MG上のファイルを待ち合わせる場合は、クラシックモードのパラメータと同様になります。		

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
JNWENGINE_OPT=-F update_check_value=<間隔(秒)>	jcexecutor_agent.yaml	■filecheck.confirmNoUpdate ■filecheck.noUpdateTime
説明		
ファイル待ち合わせ部品で通過条件が「存在する」または「更新」の場合に、一定時間ファイルの更新がされているかの確認有無を設定します。 filecheck.noUpdateTimeパラメータの設定値以上の時間更新されていないか確認し、されていなければ条件を満たす動作にする場合はfilecheck.confirmNoUpdateにtrueを指定してください。ファイルの更新を確認せずに、即座に条件を満たす動作にする場合は規定の動作のため設定不要です。 filecheck.noUpdateTimeパラメータの規定値は30秒です。規定値を変更したい場合は、合わせてfilecheck.noUpdateTimeパラメータも設定してください。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」を参照してください。 filecheck.confirmNoUpdateおよびfilecheck.noUpdateTimeパラメータは、ファイル待ち合わせ部品でJobCenter AG上のファイルを待ち合わせる際の設定になります。JobCenter MG上のファイルを待ち合わせる場合は、クラシックモードのパラメータと同様になります。		

3.3.2.1.5.2. その他のパラメータ

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
■サイト全体 サーバの環境設定の「実行設定」タブの「ユーザプロファイルを読み込む」 ■ユーザ個別 jobexe.confのuser_profile	jcexecutor_agent.yaml	■サイト全体 request.environment.userProfile ■ユーザ個別 request.environment.userSetting.userProfile
説明		
リクエスト実行時のユーザプロファイルの読み込み有無を設定します。 エージェント全体に対して設定する場合は、request.environment.userProfileパラメータで設定します。 ユーザ個別に設定する場合は、request.environment.userSetting.userProfileで設定します。その際、request.environment.userSetting.userNameに対象のリクエスト実行ユーザ名を指定してください。 ユーザプロファイルを読み込まない場合はfalseを指定してください。読み込む場合は規定の動作のため設定不要です。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」を参照してください。		

パラメータ名	移行先ファイル名	移行先パラメータ名
■サイト全体 サーバの環境設定の「実行設定」タブの「ジョブ実行時にユーザ環境変数を設定する」 ■ユーザ個別 jobexe.confのuser_env	jcexecutor_agent.yaml	■サイト全体 request.environment.userEnvironment ■ユーザ個別 request.environment.userSetting.userEnvironment
説明		
リクエスト実行時のユーザ環境変数の設定有無を設定します。 エージェント全体に対して設定する場合は、request.environment.userEnvironmentパラメータで設定します。 ユーザ個別に設定する場合は、request.environment.userSetting.userEnvironmentで設定します。その際、request.environment.userSetting.userNameに対象のリクエスト実行ユーザ名を指定してください。 ユーザ環境変数を設定しない場合はfalseを指定してください。設定する場合は規定の動作のため設定不要です。 jcexecutor_agent.yamlのパラメータの詳細は<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>の「3.1.1 エージェントの設定一覧」を参照してください。		

3.3.2.2. 引き継ぎができるデータ

移行元マシン、移行先のマシンが異なる場合、本手順を実施します。移行元マシン、移行先のマシンが同じ場合は、本手順の実施は不要です。

3.3.2.2.1. Report Helperを使用した移行

移行元環境にて取得した構成情報からReport Helperにて該当する帳票を出力して参照し、移行元の環境と同パラメータを移行先環境に設定します。各帳票の詳細や出力方法は<Helper機能利用の手引き>の「3.5　帳票シート」を参照してください。

以下の表のとおり各帳票を参照し、パラメータを設定してください。

名称	対象OS	手順
ユーザ一覧	UNIX/Windows	移行元と同じユーザを作成します。
ユーザ環境設定	UNIX/Windows	各ユーザでCL/WinでMGに接続し、メニューバーの［設定］－［ユーザ環境設定］を開いて移行元と同じパラメータを設定します。JobCenterに登録されている全てのユーザに対して設定が必要です。
システム環境設定	UNIX/Windows	JobCenter管理者ユーザでCL/WinでMGに接続し、メニューバーの［設定］－［システム環境設定］を開いて移行元と同じパラメータを設定します。
パーミッション設定	UNIX/Windows	JobCenter管理者ユーザでCL/WinでMGに接続し、メニューバーの［設定］－［パーミッション設定］を開いて移行元と同じパラメータを設定します。
イベント設定	Windows	JobCenterサーバの環境設定を開き、サイトのプロパティから[イベント]タブ、[ログ]タブ、[OPCMSG]タブを開いて移行元と同じパラメータを設定します。
エラーログファイルの設定	Windows	JobCenterサーバの環境設定を開き、サイトのプロパティから[デバックログ]タブを開いて移行元と同じパラメータを設定します。
LDAPサーバ設定	Windows	JobCenterサーバの環境設定を開き、サイトのプロパティから[LDAPサーバ設定]タブを開いて移行元と同じパラメータを設定します。

3.3.2.2.2. ファイルコピーによる移行

移行元作業のファイル類のバックアップでバックアップしたファイルを移行先環境にコピーします。

移行先にファイルを配置する際、移行元の所有者やパーミッションの整合性を合わせる必要があります。所有者やパーミッションを維持できるようにするか、整合性を合わせられるようにファイル採取時に記録したとおりに配置してください。

基本的には移行元と同じディレクトリにコピーしますが、以下のファイルのみ移行先のディレクトリが異なるのでご注意ください。

表3.2 WOBS連携設定の移行先におけるファイルパス

ファイル名	対象OS	サイト区分	移行先のファイルパス
WOBS連携設定（SVのみ）	Windows	ローカルサイト/クラスタサイト	<AGのspoolディレクトリ>\jcexecutor\agent\wobsconf.f
	UNIX	ローカルサイト/クラスタサイト	<AGのspoolディレクトリ>/jcexecutor/agent/wobsconf.f

SAPとの連携機能を使用している場合、R16.2以前からR16.2.1以降のバージョンへ移行する際に一部の設定ファイルの内容や配置場所の変更などの作業が必要となります。必要な作業の詳細につい

ては<クラシックモード用SAP機能利用の手引き>の「1.1.4　16.2以前のバージョンからのバージョンアップ時に必要な作業」を参照してください。

3.3.3. 定義情報の移行

定義情報の移行方法について説明します。

ダウンロードした定義情報には一部パラメータに移行元MGや連携していたMG、SVに関連する値が残っている可能性があります。そのため、ダウンロードした定義情報を修正して移行先MGへアップロードを行います。

定義情報の移行は、以下のような手順で行います。

1. 定義情報の一部パラメータを修正する
2. 移行先で、修正した定義情報をJPFファイルとしてアップロードする

3.3.3.1. 定義情報の修正

定義情報の修正を行います。

修正するパラメータは以下の通りとなります。

■ジョブネットワーク、単位ジョブ、WOBSジョブ部品の「投入キュー」

■ファイル待ち合わせ部品の「ホスト名」

3.3.3.1.1. ダウンロードした定義情報の修正方法

ダウンロードした定義情報を以下のどちらかの方法で修正してください。テキスト定義機能は標準機能ですが、Definition Helperは有償のオプション機能です。

■JobCenterのテキスト定義機能を利用して、JPFファイルをJDFファイルに変換し、パラメータの修正を行う

■JobCenterのDefinition　Helper機能を利用して、JPFファイルをExcelに取り込み、Excelでパラメータの修正を行う

3.3.3.1.1.1. テキスト定義機能を使用して定義情報を修正する

本手順では、定義情報をjdh_convコマンドを使用してテキストファイル（JDFファイル）に変換し、定義情報のパラメータを修正します。jdh_convコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.20 jdh_conv JDFファイルとJPFファイルの相互変換」を参照してください。

手順の概要は以下になります。

1. 定義情報であるJPFファイルをテキストファイルであるJDFファイルに変換します。以下のコマンドを実行してください。

   ■UNIXの場合

   ```
   /usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_conv -x <ダウンロードした定義情報（JPFファイル）>
   ```

   ■Windowsの場合

   ```
   %InstallDirectory%\bin\jdh_conv -x <ダウンロードした定義情報（JPFファイル）>
   ```

2. 手順1で作成されたディレクトリ配下の「jnw.jdf」をテキストエディタで開き、パラメータを修正します。修正するパラメータの詳細は「3.3.3.1.2 修正対象のパラメータ」を参照してください。
3. 以下のコマンドを実行してJDFファイルからJPFファイルへの再変換を行います。手順1で作成されたディレクトリ配下の全JDFファイルを指定します。

■UNIXの場合

```
/usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_conv customjob_template.jdf jnw.jdf sched.jdf trg.jdf wkcal.jdf
 operation.jdf
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jdh_conv customjob_template.jdf jnw.jdf sched.jdf trg.jdf wkcal.jdf
 operation.jdf
```

3.3.3.1.1.2. Definition Helper機能を使用して定義情報を修正する

本手順では、Definition　Helper　の定義編集ツールを使用して定義情報のパラメータを修正します。定義編集ツールの詳細は<Helper機能利用の手引き>の「2.6 定義編集ツール機能詳細」を参照してください。

手順の概要は以下になります。

1. Definition　Helperの「input」シートを開き、ダウンロードした定義情報をインプットとしてシートを作成します。
2. 「jnw」シートを開き、パラメータを修正します。修正するパラメータの詳細は「3.3.3.1.2 修正対象のパラメータ」を参照してください。
3. 「output」シートを開き、JPFファイルに変換します。

3.3.3.1.2. 修正対象のパラメータ

修正が必要な定義情報のパラメータと修正作業を以下に示します。

■ジョブネットワーク、単位ジョブ、WOBSジョブ部品の「投入キュー」

JDFの場合パラメータのキーは「queue」になります。

従来は<キュー名>@<マシン名>の形式でしたが、スタンダードモードではエージェントキューの場合<キュー名>@<エージェント名>、グループキューの場合<キュー名>@<マネージャ名>の形式となります。

構築する環境に合わせて、移行元の<マシン名>部分を修正してください。

■ファイル待ち合わせ部品の「ホスト名」

JDFの場合パラメータのキーは「external_host」になります。

従来のMG/SVのホスト名が、エージェント名になります。

構築する環境に合わせて、移行元の<ホスト名>部分を<エージェント名>に置換してください。

3.3.3.2. 定義情報のアップロード

修正した定義情報を以下のどちらかの方法で移行先MGにアップロードを行ってください。

■CL/WinのHelper機能から全ユーザまたは個別のユーザ毎にアップロード

■jdh_uploadコマンドによるアップロード

3.3.3.2.1. CL/WinのHelper機能によるアップロード

本手順では、CL/WinのHelper機能を使用して定義情報のアップロードを行います。

CL/Win上での操作手順については、<スタンダードモード用基本操作ガイド>の「11.2　定義情報(JPFファイル)アップロード」を参照してください。また、定義情報をアップロードする際は、以下の条件を指定してください。

■アップロード対象のユーザの指定

全ユーザを指定してください。

■（移行元と移行先で連携するMGのサイト名が異なる場合）マシン名変更を行う

移行元と移行先のマシン名を紐付けるため、[マシン名変更]を押下し、マシン名の変更を行ってください。

■キュー情報のチェックを省略

定義情報の修正で設定したキュー設定が矛盾していないことを確認するため、 [キュー情報チェックを省略する] は無効にしてください。

■（異なるマシンからの定義移行の場合）カスタムジョブ定義アイコンをアップロードする

カスタムジョブ定義を含むJPFファイルのアップロード時は[カスタムジョブ定義アイコン] を必ず有効にしてください。

3.3.3.2.2. jdh_uploadコマンドによるアップロード

本手順では、jdh_uploadコマンドを使用して定義情報のアップロードを行います。jdh_uploadコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.14 jdh_upload 定義情報のアップロード」を参照してください。

以下のとおり全ての定義を対象にオプションを指定してjdh_uploadコマンドを実行してください。

■UNIXの場合

```
/usr/lib/nqs/gui/bin/jdh_upload -a <修正した定義情報（JPFファイル）が格納されているディレクトリ>
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jdh_upload -a <修正した定義情報（JPFファイル）が格納されているディレクトリ
>
```

発行年月 May 2024
NEC Corporation　2024